
仮面ライダー剣 MISSING ACE-NEO-

ホットコーギー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー剣 MISSING ACE - NEO -

【Nコード】

N4992Y

【作者名】

ホットコーギー

【あらすじ】

剣崎一真がジョーカーとなり、世界を救ってから4年後…

突如56番目のアンデッド・白いジョーカーが現れた！

白いジョーカーはカテゴリーAも含めた半数以上のアンデッドを解放し、バトルファイトを再開させる！

果たして、白いジョーカーの目的とは？

剣崎はライダーの力を取り戻し、ジョーカーの野望を防ぐことが出来るのか？

そして、「剣」と「ディケイド」の物語が繋がる…？

この作品は以前私がアルカディアで連載していた「仮面ライダー
剣^{アンデッド}不死生物と宇宙人」からクロス要素を抜き、焼き直ししてい
ます。

プロローグ

剣崎一真がジョーカーとなり、世界を崩壊の危機から救った日から、四年の月日が流れた…

ライダーシステムを開発し、人間の手によって開放されたアンデッド達を封印するために戦った組織・BOARDは、所長である烏丸啓、仮面ライダーギヤレンとして戦った戦士・橘朔也の手によって再編された。

復活したBOARDは、紛争や貧困に苦しむ国々の支援、そして未だ戦いの運命から解放されぬ二人のジョーカー、剣崎一真と相川始を運命から解放するための研究を主として活動が続けていたのである。

途中、橘のミスによるダイヤのカテゴリ10の解放という大事にも発展してしまったこともあったが、BOARDは四年の歳月の中で以前以上の発展を見せ、組織を大きくしてきた。

しかし、未だ剣崎と始を運命から救う方法は発見できず、研究は若干の行き詰まりを見せ始めていた。

そんな研究が停滞し始めた日々の中の出来事である。

群馬県と新潟県の県境に存在する三国山脈の一つ、谷川連峰の奥地の洞窟にて、大量の古代文字が刻まれた巨大な石版レリーフが発見されたとの情報が入ったのである。

調査の為、二人を救う研究の第一人者であった橘は、谷川連峰へと向かうこととなった。

もしかしたら、二人を救う為のキッカケになるかもしれない…そんな希望を抱きながら…

…
その日は、分厚い暗雲が立ち込める薄暗い不気味な日であった…

橘はレリーフを発見したガイドに案内を頼み、山の奥地の洞窟の前

へと立っていた。

突如、一粒の水滴が空から落ちたすぐ後にバケツを返したような土砂降りの雨が降り注ぐ…

橘とガイドは懐中電灯のスイッチを入れると、ゆっくりと洞窟へと足を踏み入れた。

洞窟の中は想像以上に薄暗く、何匹もの蛇が巢食う気味の悪い場所であったが、橘は気にせず前へと進んでいく。

仲間を助けるための術があるかもしれないという希望が、橘の中に疼いていたからである。

やがて、二人は洞窟の最奥へと到達し、橘は電灯で前方を照らした。

「これは…!」

橘は息を飲んだ。

古代文字がびっしりと刻まれた五メートルはありそうな巨大なレリーフが、報告通り、確かに目の前に存在したのである。

報告に無かったことと言えば、レリーフの中心に空いた大きめの穴ぐらいのものであった。

もともと学者であった橘にとって、この不思議なオーパーツは目を引かずにはいられない代物である。

「貴方が行っている研究と何か関係がありますか？橘さん？」

ガイドは橘にそう話しかけたが、橘の耳には入っていなかった。

「これが、剣崎達を救うための新たな希望となるかもしれない…」
「新たな希望に高揚を隠しきれず、科学者としての冷静さを欠いてしまっていたこの時の橘には分からなかった…」

このレリーフが、新たな戦いを呼び起こす火種となることに…

…

丁度その頃、断崖絶壁の上に位置するBOARD本部の研究室では、恐ろしい事態が発生していた。

突如何者かが研究室を襲撃し、施設を破壊してしまったのである。ライダーである橘が不在であったため、BOARDは満足な抵抗が出来ず、防衛が満足に行えなかったのである。

そして、所長である烏丸も様々な生物達の始祖であり、かつて四人の仮面ライダー達によって倒されたアンデッド達を封印したプライムベスタを守るために武器を手にとって戦ったが、やはり満足な抵抗はできず、重傷を負ってしまったのであった。

「お、お前は…!?!」

何とかハートとダイヤのカテゴリ^十Aと、数枚のカードを守った烏丸は、薄れゆく意識の中で、研究室を襲った異形の影を睨んだ。

異形の影は半数近くのプライムベスタを手に取り、ゆっくりと自分が壊した壁へと歩いていく。

その姿は左右の装飾が逆であり、体色も白と赤と違っていたが、烏丸には心当たりがあった。

全てのアンデッド達の中で最強の戦闘能力を誇り、「残酷な殺し屋」、「最後の切り札」と呼ばれたアンデッド…ジョーカーであった。

白いジョーカーは体を赤く輝かせながらその姿を消すと、烏丸は気絶し、意識を失った。

そして気絶した烏丸のその手から、必死に握りしめていたハートのA「チェンジマンティス」、ダイヤのA「チェンジスタッグ」の二枚が零れ落ちた…

…
それから数ヶ月の日時が経過したある日のこと…

平和を謳歌していた日本の首都・東京の街にて、恐ろしい出来事が起こっていた。

「猪」、「海月」、そして「陸亀」の三匹のモンスターが現われ、白昼堂々と人々を襲っていたのだ。

この三匹のモンスターが四年前「仮面ライダー」によって封印された「アンデッド」達であり、邪な方向に進化した人類の駆逐、そして種の保存のための「バトルロワイヤル」を行い、自分が属する種族を地球の支配者にすることを望む者達である。

彼らにはあらかじめ戦うための運命が決められており、それに最後まで抗えるアンデッドは「ただ一人」を除いて存在しない。

本能のままに暴れるアンデッド達は自らの牙や怪力で次々に命を奪い、人間が作り上げたものを壊していく。

だがそんなアンデッド達の前に三台のバイクが駆けつけ、それから降りた三人の男女がヘルメットを外してアンデッド達に立ちはだか

「行くぞ！禍木！夏美！」

「ああ！」

「ええ！」

三人の男女は奇妙な形をしたバックルを取り出し、それに「ケルベロス」が描かれたカードをセットすると、それを腰に装着し、中心部を展開した。

そして三人の前に黄・赤・緑の三色のスクリーンが出現し、三人は自分達に迫ってくるそれを潜り抜けると、四年前とは違う新たな「仮面ライダー」へと変身し、各々の武器である「剣」「弓」「槍」を取り出し、アンデッドに立ち向かった。

「ラルク」「ランス」…そして「グレイブ」。

アーティフィシャルケプラーという特殊な合金系で縫われたスーツを纏った新たな仮面ライダーたちは、圧倒的な力でアンデッドを圧倒していく。

だが、この三人は「アンデッドを封印する」という使命のほかに、

「増長」という愚かな感情も持ち合わせていた。先立ちのライダー達がもうおらず、戦う者が自分達しか居ないという環境が彼らに「増長」を与えてしまっているのだ。

三つの傲慢な刃は瞬く間に敵をなぎ払い、「ラウズカード」へと封印する。

三人は戦いを続けるたび、より強く、より愚かになっていくのであった…

新たにめくるめく戦いの運命の中、この三つの刃の「増長」を抑え、壊れそうな未来を守るための勇気の剣は…まだ目覚めない…

…
「ッセイ！ヌン！」

一方、新世代の三人が向かった位置と違う市街では、漆黒の仮面ライダーがムカデの祖であるアンデッド「センチピードアンデッド」と戦いを繰り広げていた。

仮面ライダーカリス・相川始である。

旧世代ライダーの中で唯一前線で戦っている彼は、獣に似たスピーディーな戦い方で自らの武器である「カリスアロー」を振るい、その刃で敵を切り刻んだ。

やがてバツクルを取り外してそれを武器にセットし、腰のラウズバシクから二枚のカードを取り出して「ラウズ」すると、必殺技の一つである「スピニングウェーブ」を発動させ、竜巻を纏った手刀でセンチピードアンデッドを切り裂いた。

そして「プロパーバシク」にアンデッドを封印すると、カテゴリー2「スピリットヒューマン」をバツクルにラウズして人間の姿へと「化身」した。

だが、戦いを終えた彼を支配していたものは以前のような戦いの後の高揚ではなく、例えようもない大きな空しさであった。

戦友である三人の内の一人、上城睦月はAのカードが解放されてい

るために変身することが出来ず、もう一人の橘朔也もとある事件で重傷を負ったBOARD所長・烏丸啓の代理と新世代の指揮で前線には出れず、親友の剣崎一真も行方不明…

新世代のライダー達は自分に協力するどころか旧世代である自分を疎むばかりで連携が取れない。

味方の居ない始はただ一人、孤独な戦いを続けることしか出来なかった…

「剣崎…」

始は悲しげな瞳で青空を見上げ、自分と同じ存在となって何処かに消えた親友の名を呟いた。

彼も、自分の運命と戦い続けているのだろうか？

…

「ふう…」

「今回も駄目だった。」

就職活動で面接試験を受け終えたばかりの上城睦月は公園のベンチに座りながらそう思った。

今回は一流企業の面接だったのだが、二人の面接官が面接の途中で喧嘩を始めてしまい、有耶無耶になってしまった。

だが睦月にはそれより気がかりなことがあった。

再び解き放たれたアンデッド達の事である。

橘からは「クラブのAも解き放たれてしまった。お前は普通の生活を送れ。」と言われ、就職活動に臨んでいるが、とても身が入らない。

だからといってもうレンゲルに変身する事もできないため、橘達の手助けもできない。

この世界に再び迫っている脅威を知っているのに自分は何もできな

い。

睦月はそれが腹立たしかった。

「剣崎さん……」

睦月は空を見上げ、自分の先輩ライダーであつた剣崎のことを思い浮かべた。

自分は三年前、橋のミスで解放されたカメレオンアンデッドと戦つた際、駆けつけてくれた剣崎に橋達が剣崎と始を救うための研究をしているということ伝えられなかつた。

彼は今、何処で何をしているのだろうか？

：

内戦が続き、人々が苦しみにあえぐ中東の戦地に、一人の男の姿があつた……

「ふあゝあ……もう朝か……やっぱり、ここじゃ寝心地が悪いなあ……」

男は埃っぽいベッドから起き上がると、大きな欠伸をした。

男がいた部屋には、家具が殆どなかつた。

あるものは彼が寝ていた薄汚れたベッドと円形の古く、ボロボロな座卓、そしてヒビの入つたランプと、数本の薪の入つた長方形の缶箱だけが置かれていた。

本当に殺風景な部屋だが、この国には物が殆どないため、家具が少ないのも仕方がない。

むしろ、ベッドが手に入っただけラッキーであると男は思っていた。ベッドから立ち上がった男は来ていた黒のタンクトップの上に薄い紺色の長袖の服を着ると、昨日汲んでおいた綺麗な水で顔を洗い、大きく背伸びをした。

「さて、今日も頑張らないとな！」

男は爽やかな笑顔で気合を入れ、部屋のドアを開き、自分が住んでいる小汚い小屋から、朝日がまぶしく照りつける外へと歩みだした。

男の名は剣崎一真…かつて仮面ライダーブレイドとしてアンデッド達と戦い、その身を異形の怪物へと変えて世界を救った男であった

…

プロローグ（後書き）

すみません…本当に焼き直しになる予定です。

光の伝説も放置してこんなもの掻き始めてすみません。

バイオハザードもヒントにしようと思い始めたのですが中々思いつかなくて…

とりあえずこの作品はアルカディアで私が連載していた剣とハルヒのクロス物語を基盤にしますので放置はしないと思います…

ダメな作者ですがよろしくお願いいたします…

ちなみにディケイド要素は終盤までありません。

第1話

自分が住んでいた小屋を出て剣崎が向かったのは、そこから二キロほど離れた小さな村であった。

その村は内戦地に近く、負傷した兵士がそこに運ばれてくることも少なくなかった。

財政は貧しく、支援団体の手もまだ行き届いていないため、剣崎は週に1度この村の手伝いに来ているのである。（ちなみに他の日は他の村の支援に行っている。）

そして村に着くと、村の村長が剣崎を出迎え、握手をしてアラビア語で話し掛けてきた。

剣崎も不器用なアラビア語で村長と話し、彼から手伝ってほしい事柄を聞くと、意気揚々と病院の方へと向かっていった。

「今日は病院の手伝いか…よし今日も一日頑張るとするか！」

村長から頼まれたのは、診療所で負傷した兵士や、戦いに巻き込まれた人々の手当である。

人手が足りないこの村は、まるで疲れを知らない剣崎の働きぶりに助けられているのである。

もちろん、剣崎が疲れにくいのはその強靱な体が原因であるのだが…

…

剣崎は強靱な肉体を駆使し、診療所でせっせと働いた。

医師が必要とする薬や道具を一気に運び、移動が困難な患者を抱えたり、背負ったりしながら、テキパキと手伝いを済ませていく。

そんな仕事の最中、患者達は皆剣崎に笑顔を見せ「ありがとう」とお礼の言葉を彼にプレゼントした。

剣崎は、この人々にお礼を言われる瞬間がとてもうれしかった。

皆心の底から剣崎に感謝し、必要としてくれる時間だけが、今の剣崎にとって何よりの至福だったからである。

剣崎は始達と別れた後、一度アメリカへと渡り、それから苦しんでいる人々たちを守りたいと、世界中の戦地を転々としてきた。

今まで自分達が助けてきた人たちの笑顔は、今でも記憶に焼き付いている。

辛い運命を歩む剣崎にとって、人々の笑顔は何物にも勝る心の栄養源なのである。

やがて、数時間必死に働いた剣崎に、休憩時間が言い渡された。

「よし！それじゃ、あいつらの所に行くか！」

剣崎は楽しそうな笑顔を作ると、子供のように駆け出して何処かへと向かっていった…

：

剣崎が向かった先は子供達が集まっている広場だった。

剣崎は仕事の合間、子供達の遊び相手をしてあげてくことを日課にしているのである。

少年達は空気の入っていないサッカーボールでサッカーをし、少女達は少ししおれた花でネックレスや冠を作っていた。

剣崎は少しぎこちないアラビア語で子供達を呼ぶと、子供達は彼に向かつて集まってきた。

それから、自分が思いつく限りの遊びを子供達と共に行った。

かくれんば、おにごっこ、けんけんば、あっちむいてほいなど、日本の子供達が行っている遊びの数々である。

子供達は週一で来ていた剣崎からそれらの遊び一式を教わっていたため、ぎこちなさなど感じさせずに剣崎と楽しく遊んだ。

一通り遊び終えた後、剣崎と一緒に遊んでいた一人の少女から、花で作ったネックレスを首に下げられ、プレゼントされた。

「カズマ、アゲル。」

少女は、剣崎から教わった簡単な日本語を喋ると、キュートな笑顔を見せた。

「サンキュ！大事にするよ！」

剣崎は少女の頭を撫でると、少女は嬉しそうに微笑んだ。

中東の国々は衛生状態が悪く、食べ物もあまりなく、この村は内戦で元居た村をやられて引越しをやむなくされた人々も多い。

幼いながら病気を抱えてしまっている子供、空腹に苦しむ子供も、両親のいないこの村には多かった。

この少女も村を失い、家族と共に今の村に移住した子供の一人であった。

剣崎は内戦に苦しむ人々を助ける日々を始めてからというものの、こういった心を痛める事情を何度も目にしてきた。

そんな悲しい目にあってきた子供たちに少しでも笑顔を与えたい…自己満足かもしれないが、剣崎はそう思っていた。

自分が遊び相手になってあげることでも寂しさを紛らわせてあげられたら…

そう考えると、休憩などしていられたのであったのである。

今では、剣崎にとって子供達の遊び相手となることは、人を助ける事と同じぐらいの心の栄養源である。

終わらない戦争の中で少数の人々を助ける事を誰かに偽善的だと思われるわけても構わない…

例えそれが物事の解決にならなかったとしても、剣崎は悲しんでいる人々を見過ごすことはできないのだ。

やがて休憩時間も終わりが近づき、子供達とも別れる時間がやってきた。

子供達はもつと遊んでくれと剣崎に縋り付くが、剣崎は子供達の頭を優しく撫でていくと、笑顔で言った。

「よしよし！大丈夫だよ！仕事が終わったらまた遊んでやるからさ
！」

渋る子供達にそう言い聞かせると、剣崎は再び村の診療所へと戻っていった…

…

それから剣崎は、料理や洗濯の手伝いを診療所で行い、本日頼まれていた仕事の全てを数時間かけて丁寧に終わらせた。

剣崎自身はもつと手伝ってもよかったが、診療所で働く人々があまり剣崎を頼ってもいけないと遠慮したため、厚意を受け取ったのである。

選別として少しの日用品と食べ物を買った剣崎は、少し汚れた袋にそれを詰め込んだ。

いくら死の概念がないアンデッドといえど、剣崎は元は人間。

人間らしい生活をしながら生きていきたいと願うのは不自然ではなかった。

剣崎はこうして、生活に必要な物を調達してきたのである。

「よし、それじゃ約束を守りに行くかな。」

剣崎は袋を手に持つと、先程遊ぶ約束をした子供達の元へ向かおうとした。

だがその時、剣崎の研ぎ澄まされた感覚が無数の悪意を感じ取った。

「うつ…！？」

剣崎は思わず日用品と食べ物が入った袋を地面に落としてしまい、額を右手で押さえつけた。

「何だ…この感覚は？」

剣崎が疑問を口にすると同時に、診療所の外から多くの人々の悲鳴が沸きあがる。

剣崎はその悲鳴を耳にすると、一目散に診療所の外へと駆け出して行った。

…

病院の外に出た瞬間、剣崎の表情は驚愕に彩られた。

村の人々が無数の白いゴキブリに似た怪物に襲われ、食い殺されていたのだ。

そして怪物の姿を見た瞬間、剣崎は目を大きく開き、叫んだ。

「ダークローチ!？」

怪物達は自分、もしくは親友である相川始が「バトルファイト」に勝ち残った際に出現する全生命のリセッター・ダークローチに酷似していたのだ。

だが怪物達の体色は黒く彩られたダークローチと違い、白である。完全に、自分が知っているダークローチの姿と違っているのだ。

こいつらは一体何者だ？

剣崎は彼らの正体について考えようとしたが、その間にも人は襲われていく。

まず剣崎は怪物達の撃破と人々の救出を決め、異形の敵へと向けて駆け出して行った。

「止める!相手は俺だ!」

剣崎は白いダークローチ達へと飛びかかると、ライダー時代に鍛え抜かれた戦闘能力を駆使し、戦いを挑んだ。

「ハッ！おりゃあ！ウェイ！！」

剣崎のパンチやキックは人間の姿のままでも高い威力を誇り、一撃で怪物達を地面に叩き伏せていく。

しかし、剣崎がどれほど強く、相手の戦闘能力が低いといっても、剣崎が一人に対し、怪物達は無数だ。

加えて剣崎は人々を守りながら戦っているため、状況的に不利は必至である。

そんな物量に苦戦しながら戦う剣崎の目に、転んで膝を打ち、泣いている少女の姿が目に入った。

先程自分に花のネックレスをプレゼントしてくれたあの少女である。そして動かない獲物を怪物達が見逃すはずもなく、数匹の白いローチ達が不気味な叫び声をあげながら少女へと襲い掛かった。

「危ない！」

剣崎は自分が戦っていたローチを突き飛ばすと、人間を凌駕した驚異的なジャンプ力で少女の前まで移動し、両腕を広げて盾となる。

「止めるおおおおおおお！！」

剣崎の絶叫と同時に気色の悪い音が響き、怪物達の爪が深々と剣崎の腹部へと突き刺さった…

…

少女はいつも剣崎と遊ぶ広場で、彼の仕事が終わりに、広場に来てく

れるのを待っていた。

剣崎が来たら今度はどんなことをして遊んでもらおうか？

わくわくしながらそんなことを考えていると、村の方から悲鳴が上がった。

何事かと思いい広場の外に出てみると、見たこともないゴキブリに似た怪物達が人々を襲い喰らっていたのである。

怪物達はすぐに少女の姿も見つけ、新たな餌を求めて少女へと襲い掛かってきた。

少女は一目散に逃げたが、逃げる途中で強く転んでしまい、痛みで歩けなくなってしまった。

そんな少女に、怪物達が爪を向けて襲い掛かる。

「もうダメだ…」

諦めた少女は固く瞳を閉じて死を覚悟した。

だが、いつまでたつても怪物達の爪が少女の肌を切り裂くことがない。

少女は恐る恐る目を開けると、少女の眼前には信じられない光景があった。

少女が大好きだった剣崎が、自分の代わりに怪物達の爪に突き刺さっていたのだ。

毒々しい、「緑色の血」を流しながら…

「カズ…マ…？」

「グッ…ウオオオオオオオオ！」

剣崎は自分を刺している怪物を殴り飛ばすと、少女の方を少し振りかえり、再び前を向いた。

そして天を向き、獣のような雄叫びで叫ぶ。

剣崎の咆哮は周囲を震撼させ、体は水のような輝きで覆われてその姿を変えていく。

体は黒く、より獰猛な形状へ、腕と足は緑色に変色し、爪はより鋭

く変化する。

次第に、明るい笑顔が特徴的だった顔も、牙を剥き出しにした凶悪な獣のような顔へ変化すると、胸部の宝玉に似た個所が先程の血の色のように緑色に輝いた。

これが剣崎の本性であり、史上最強のアンデッド・ジョーカーである。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

ジョーカーは再び吼ええると、自らの武器である破壊剣・オールオーバーをその手に召還し、怪物達へと切りかかった。

その姿には、少女が大好きだった優しい剣崎の面影は微塵も残されていないかった：

獣のように激情に任せた雄叫びを上げたジョーカーは手に持ったオールオーバーを構え、白い凶獣達に襲い掛かっていく。

怪物達は群れを成してジョーカーに襲い掛かったが、「雑魚」である白のローチ達などジョーカーの敵ではなかった。

正面、上空、背後、ジョーカーはあらゆる方向から襲い掛かる怪物達を自らの剣で柔らかい肉のように切り裂いていく。

切り裂かれた怪物達は次々と火花を上げて白骨化し、消滅していく。驚異的な数で人々を襲っていたローチ達は次々とジョーカーに倒され、数を減らしていった。

それから数十分ほどの時間が経ってほとんどのローチが倒され、やがて最後の一体となったローチの腹部をジョーカーの剣が貫いた。

「ア…ア…」

ローチは息も絶え絶えにジョーカーに向けて手を伸ばすと、ぎこちない人語で言葉を発した。

「ニホン…コイ…ソコデ…アラタナ…タタカイガ…」
「!？」

ローチはそっくり残すと、白骨となり、消滅した。
戦いを終えたジョーカーはオールオーバーを下げ、助けた少女の方に振り返った。

少女は驚愕に染められた表情のままジョーカーを見つめ、ジョーカーは彼女から目をそらして後悔したようなため息をついた。
そんなジョーカーに、一発の猟銃の弾が命中した。

ジョーカーが銃弾が飛んできた方向を向くと、そこには猟銃や石を持った村人達の姿があった。

「化け物！」

「出て行け！」

村人達は口々にそう言い、ジョーカーに向けて銃を撃ち、石を投げつける。

ジョーカーは鋭利な両腕で自分の身を守りながら村人達に背を向けると、呻き声を漏らしながら逃亡した。

そして少女は悲しげな瞳で、逃げていくジョーカーの姿を見つめた…

…

日が沈み始めたころ、剣崎は自分が住んでいる小屋へと戻ってきた。その瞳は悲しみに彩られ、腹部にはローチに刺された傷が生々しく残っていた。

だが剣崎は傷の痛みなど痛くはなかった。

本当に痛かったのは村人達や少女からの視線だ。

避難を終えてからジョーカーになったため、少女以外の村人達には自分の正体を知られてはおらず、彼らがジョーカーとなった自分にした反応も当然のものである

いや、村人達が例え怪物の正体が自分だと知ったとしても恐怖の眼差しで自分を見ただろう。

こういった仕打ちは以前アメリカに居た時や他の地域や国の戦地で争いを止めようとした時にも受けているが、慣れる事ができるようなものではなかった。

あの目で見られるたびに、自分が人間でなくなってしまった悲哀に身をズタズタに切り裂かれる…

今まで外国の人々と気付いてきた信頼関係も仮初のものにすぎないと肌で感じてしまう。

だが剣崎は親友との約束があればこそ、こんな悲しみや自分が背負った苦しい運命に耐え抜き、人助けを続けることが出来るのだ。

この運命を選択したのはほかならぬ剣崎自身である。

始を助けたいという自分の選択で犠牲にしてしまった人々達への償いのためにも、剣崎に弱音を吐くこと、そして運命に敗北することは許されないのである。

「それにしても…あのローチが言っていたことは一体…？」

最後のローチを剣で貫いたとき、確かに人語で、「日本に来い。そこで新たな戦いが…」と言っていた。

詳しい理由はわからないが、日本で何かが起こっていることに間違いはなさそうであった。

「また…日本に帰るのか…」

剣崎は三年前、アンデッドの気配を感知して仲間達の元に向かい、自分をコピーしたカメレオンアンデッドと戦った時の事を思い出した。

だが今回のヤマはあの時よりずっと大きそうだ。

正直に言えば、日本に帰りたくはない。

あのローチの言うとおり、この件にはきつとアンデッドやバトルフ
アイト絡みの事象が関わっている。

日本に戻ればきつと、始や橋、睦月達仲間の仮面ライダー達にも出
会うことになるだろう。

仲間には会いたいが、会えばきつと別れるのが辛くなる…

現に三年前も、直接会話してはいないものの、仲間の姿を見ただけ
でどつと心に悲しみが押し寄せた。

だが我儘を言っている場合ではない。

自分がいかなければきつと、とんでもない事態に発展するような気
がするのだ。

「行くか…日本へ…！」

剣崎は日本への帰還を決意し、小屋の出入り口へと向かって引き戸
を開け、外に踏み出した。

そして日本へと向かう彼の後姿を、満月が優しく照らしていた…

…

新生BOARD本部の地下深く…巨大なレリーフが保管されたそこ
に、一体の異形の姿があった。

それは剣崎や始の正体であるジョーカーに酷似していたが、体の形
状が二人とは逆になっており、体色も白に彩られていた。

白いジョーカーはレリーフに触れ、それをなぞる様になると、そ
の影からは無数のローチ達が現れ、室内を蠢き始めた。

やがてジョーカーが「人間」の姿に変化すると、ローチ達は雄たけ
びを上げながら何処かに向け蠢き始めた…

第1話（後書き）

元の作品では無駄に長かった部分を短縮していることと思います。
個人的に元の作品とどちらが良かったか気になりますのでご意見、
感想いただければ幸いです。

二話用に用意していた物語を、思っていたよりも短かったために追
記しました。もっと考えてから投稿すべきですね…

第2話

剣崎が日本に向かっていた頃、東京都内の高級クラブが貸切で営業していた。

そこでは王冠を被り、豪華な衣装を着た一人の男がワインを飲み、バニーガール達と談笑しながら豪遊していた。

白井虎太郎：剣崎の友人の一人であり、彼ら仮面ライダーの活躍を本にし、その活躍を人々に伝えて莫大な財産を築いた青年である。虎太郎はワインを飲むのを中断し、カラオケを楽しむと、二人の地味なスーツを着た男が拍手をしながらバニーガール達と共に近づいてきた。

二人の男は出版社の人間であり、その内一人は当時虎太郎が出そうとした本をバツシングした会社の編集長だった。

今は有名人となった虎太郎の腰巾着となり、多額の金を使って彼の接待を行っているのだ。

「白井虎太郎先生に、かんぱ〜い！」

編集長は歌うのを終えて自分の椅子に座った虎太郎を称えると、彼が書いた本「仮面ライダー」という名の仮面」をスーツから取り出した。

「いやあ、しかし当たりましたね先生のご本！何せ二千万部突破の大ヒットだ〜〜〜！！！」

編集長はバニーガール達と共に彼をさらにべた褒めし、虎太郎はワイングラスを掲げて彼らに微笑んだ。

そんな中、編集長の補佐を勤めていたもう一人の社員の男が恐る恐る口を開いた。

「けど先生、そろそろ次の本お願いできませんかね？もちろん家の支社から…」

それを聞いた虎太郎は表情を歪め、グラスをテーブルに置いた。

「気に入らないなあ…」

「な、何がですか？」

編集長が聞くと、虎太郎は嫌味な目つきで彼ら二人を見つめながら口を開いた。

「早く書け書けとせかせる君達のその態度だよ。作家のナイーブな神経が全く分かってない。」

「それは気づかず失礼しました！」

「失礼しました！」

二人は土下座で虎太郎に頭を下げ、虎太郎はそれを見てニヤニヤと笑いながらワインを飲んだ。

だが虎太郎はこんな豪勢な生活の中に少しの虚無感を感じていた。確かに楽しい生活だが、どこか本当の自分ではないような気がしていたのだ。

その理由は、自分が以前感じていた充実感を感じることが出来ないからである。

以前の虎太郎は剣崎に協力して住む部屋を提供し、彼らの活躍を後世に残すために多くの出版社に強大な圧力から何度も断られながらも、ライター達のようにあきらめず自分なりに奮闘して生きていた。今はその努力が実り、この生活を手にすることが出来たのだが、虎太郎にとってはやはり自分なりに精一杯生きていた昔の方が良かったかもしれない時に思ってしまうのだ。

虎太郎がそんなことを考えていたその時、テーブルに置いた彼の金メッキコーティングを施された携帯電話が鳴り響き、虎太郎はそれを手にとって電話に出た。

電話の相手は自分の姉である栗原遥であった。

「ああ、姉さん。ご・ぶ・さ・た！」

虎太郎はテーブルに乗ったゴミを手にとってくずかごに投げると、ゴミはくずかごにすっぽりと入った。

：

その翌日、仮面ライダーカリス・相川始は、自分の下宿先であり、虎太郎の姉・栗原遥の店である喫茶店「ハカランダ」の自分の部屋でカメラの手入れをしていた。

始はカメラマンなのだ。

そしてこの部屋も、今は亡き遥の夫・栗原晋が使っていた部屋であった。

アンデッドである始がここにきた理由は、晋が亡くなった原因が始にあったからだ。

始は以前カードから解放されて二年余りが立った頃、大雪が降る谷川連峰でカリスの力を使い、ダイヤのカテゴリーク「ギラファアンデッド」と戦った。

晋は偶然その場に居合わせ、その戦いを見ていたのだ。

だがカリスが弾き飛ばしたギラファアンデッドの剣「スケルター」が、偶然晋の腹部を貫いてしまった。

カリスがギラファアンデッドを追い払った後、「ヒューマンアンデッド」の姿を借りた始に、晋は自分と自分の妻である遥と娘の天音が写った写真を始に渡した。

自分の代わりに家族を守って欲しいという意思表示だった。

始はその写真を受け取り、自分でも何故かわからぬままに晋の家族

の元に訪れ、彼女達の家に住み着き、解放されたアンデッド達と戦ったのだ。

その戦いの中で人間の愛を学び、剣崎という友を手に入れ、数々の運命を乗り越えて今に至る。

「剣崎……」

始はカメラの手入れを中断すると、親友の名を呟いた。

四年前、BOARDが壊滅して間もない頃、剣崎は強く共に戦う仲間を求めた。

当時剣崎と和解していなかった始はそれをうるさく思ったが、今は彼の気持ちがよくわかる。

今の自分も昔の彼と同じで、一人で孤独な戦いを続けている。

橘が選んだ新世代ライダー達とも共闘したいとは思っていたが、彼らは耳を貸さずに自分達だけで戦い、時に後ろから自分を攻撃して自分が戦っていたアンデッドを横取りしたこともある。

自分以外に力を持つ者は強大な敵を前に力を合わせようとはせず、自分のかつての仲間達も自分を除いて戦えない。

始はらしくもなく淋しさを感じていた。

きつと剣崎もこんな気持ちだったのだろう。

仲間がここまで恋しくなつたのは初めてだ。

始は重い溜息を付き、カメラの手入れをしようとした時、部屋のドアが大きな音を立てて開いた。

そしてその向こうから、元気な少女が現れ、笑顔を見せた。

「ただいま始さん！」

「天音ちゃん……」

栗原天音、遥の娘である。

四年の歳月を経て中学生になった彼女は、今も変わらず明るく、少

々生意気なままであった。

天音は始の後ろに回ると、彼の肩を掴み、手ごろな強さで揉み始めた。

「おやおや、凝ってますねえお客様。」

「天音ちゃん、プレゼントの為の機嫌とりかい？」

「ちくがう！これは私の始さんへの感謝の印よ。いつもデートしてもらってるし。」

始はふつと笑うと、「分かった分かった。誕生日はちゃんとプレゼントあげるよ。とりあえず今は上行ってて。俺もカメラの手入れが終わったら行くからさ。」と彼女に言った。

それを聞いた天音は元気に返事をする、急いで部屋から出て上に乗っていった。

始はそれを笑顔で見送ると、そのままカメラの手入れに戻った。

もうすぐ天音の誕生日のため、彼女はその日に始と楽しく過ごせる事を妄想してハイになっているのだ。

こんな辛い状況の中、始にとって唯一の救いは彼女の笑顔であった。彼女の存在と剣崎との約束があるからこそ、始も過酷な運命に絶え、戦い続けることが出来るのだ。

だが彼女の笑顔に救われたのも束の間、始の研ぎ澄まされた獣の感覚が強く疼いた。

暴れ回るアンデッドの気配を感じ取ったのだ。

「また奴らか…」

始は手入れ道具をテーブルに置くと、バイクのヘルメットを取って部屋から飛び出した。

…

ウルフアンデッドは上級アンデッドではあったが、数々の戦いを潜り抜けてきたカリスはその力を上回っていた。劣勢のウルフアンデッドはカリスから数メートル後退りすると、カリスはその鋭い眼光でウルフアンデッドを睨み付けた。

「諦める、貴様では俺に勝てない。」

「…どうかな？」

上級アンデッドのため、人語を利用できるウルフアンデッドは再び大きく吼えると、ウルフアンデッドが殺した人間達が起き上がり、狼人間と化してカリスに襲い掛かった。

「な!？」

狼人間達はカリスに掴みかかり、動きを封じる。

ウルフアンデッドの爪にはウルフウイルスというウイルスが仕込まれており、倒した死体を狼人間「ワーウルフ」へと変える力がある。

ウルフアンデッドはワーウルフを作り出し、それを手駒として操って戦う戦法を得意としているのだ。

「終わりだカリス!」

ウルフアンデッドはワーウルフ達に掴まれ、身動きが取れないカリスを自分の爪で切り刻み始めた。

そしてカリスが窮地陥ったその時、志村、禍木、三輪の三人が到着した。

だが三人はすぐに変身しようとはせず、カリスのピンチを傍観し始めた。

「あーあ、やられてるぜアイツ。」

「さっさと負けちゃえばいいのよ。そうした方が邪魔者は居なくなるし、ジョーカーの力も手に入るわ。」

禍木と三輪は切り刻まれるカリスを楽しそうに見つめ、志村は彼らの中央に立って口を開いた。

「もう奴等の時代じゃない。時代遅れのライダーには、退場願おう。」

志村は危機に陥るカリスを見ると、邪な笑みを作り出し、白い歯を不気味に見せた。

…
「ふう…また駄目だ…」

新しい会社の面接を受け負えた睦月は重い溜息を付き、持っていたミネラルウォーターを飲んだ。

今日もまた面接の手応えがなかったのだ。

これでもう50社目の失敗だ。

睦月はつくづく面接や試験に弱い自分に嫌気がさした。

大学受験のときも、多くの大学に落ち、最後の最後でようやく補欠合格にありつけたのだ。

だが不況の今、就職試験は大学受験以上に難しく、睦月は受験の時以上に憂鬱であった。

睦月は再びため息をつき、もう一口ミネラルウォーターを飲もうとした。

その時、彼の前を必死に逃げ惑う人々が通り過ぎた。

「何だ？」

気になった睦月は人々が走って来た方角に行ってみることにした。

：

睦月が着いた先は自分が面接を受けた会社から数十メートル離れたビル街で、そこではカリスとウルファンデッド、ワーフルフの戦いが行われていた。

「相川さん！」

カリスはウルファンデッドと大量のワーウルフ達に圧倒され、劣勢だった。

睦月は今すぐにもカリスを助けに行きたかったが、今の自分にはライダーの力がなかったため、何もできない。

睦月は悔しさでこぶしを強く握り締めた。そしてふと周りを見回してみると、カリスのピンチを笑いながら傍観している志村達の姿を見つけた。

「あいつら！？」

睦月は以前橋に彼らを紹介してもらったことがあるため、志村達がライダーであることを知っていた。

だが自分以外に力を持った彼等はカリスを助けに行こうとはせず、むしろその危機を楽しみながら見物している。

睦月は彼らの態度に怒りを覚え、志村達の下に走り、志村の胸倉をつかんだ。

「おや、誰かと思えば上城さんじゃないですか？部外者が僕らに何か用ですか？」

志村は嫌味な口調で睦月に言い、睦月は眉間に皺を寄せて大きな声で叫んだ。

「お前ら！なんで相川さんを助けない！？同じ仲間だろ！！」
「おい。」

志村の右隣にいた禍木は睦月の手を払いのけ、志村を守るように二人の間に入ると、睦月を小ばかにした口調でしゃべり続けた。

「勘違いすんなよ。あいつは…相川始はジョーカー、アンデッドだ。あいつも俺達のターゲットだぜ。」

次に三輪が禍木の隣に立ち、彼女も睦月を見下した眼差しで話しかけた。

「ジョーカーは危険な存在よ。居なくなってくれたほうが人類にとって安全だわ。私達もジョーカーの力が手に入るしね。」

「楽しみだぜ。ジョーカーを封印したらどんなカードになんのかなあ？」

禍木の一言を聞いた睦月は堪忍袋の尾が切れ、禍木を殴り飛ばした。始をアンデッドとしか見ていないこともそうだが、以前スパイダーアンデッドに支配され、始をカード呼ばわりした自分と禍木が重なったからである。

禍木は固い地面に叩きつけられると、腫れ上がる頬を押えて逆上した。

「デメエ…やりやがったな！！」

禍木は立ち上がり、睦月を殴り返そうとした。

だがすでに睦月はそこにはおらず、上着を脱ぎ捨ててカリスの元に向けて走っていった。

：

「はあ…はあ…」

カリスは地面に膝を付き、肩で息をしていた。

すでに体力は限界近く、ワーウルフ達もウルファンデッドも健在だ。とても彼らを迎撃する力は残っていない。

カリスはもはやここまでかと覚悟を決めた。

その時、木の棒切れを持ってこちらに走ってくる睦月の姿を見つけた。

「相川さん！」

睦月は棒切れを杖のように振るってワーウルフやウルファンデッドを攻撃したが、効果はなく、逆にウルファンデッドに殴り飛ばされてしまった。

「うわ！？」

「睦月！」

カリスは立ち上がって睦月に駆け寄り、彼を抱き起こす。

そして彼を揺すりながら安否を確認した。

「睦月、なぜこんな…」

「相川さんの戦いを見ていたら、俺も黙ってられなかったんです…」「何？」

「志村達が相川さんの戦いを傍観してました…あいつら、相川さんが弱った所を狙って、封印しようとしてたんです。やっぱりあいつ

らは、俺達に協力する気なんか無い…

それどころか、俺達を邪魔者としか思っていないんです…俺は、貴方をカードとしてしか見ていないあいつらが仮面ライダーを名乗るなんて納得できない。

だから相川さんの力になろうとしたんですけど…

やっぱり俺なんて、レンゲルになれなきゃ、何の力にもなれませんね…すみません…」

「睦月…」

カリスは睦月を支える手に力をこめた。

彼は今まで何をやってきたのだと自分を責めた。

仲間が居ないという理由で寂しさを感じていたが、睦月はライダーの力が無くとも自分を助けようとしてくれた。

それなのに唯一力を持っていたにも関わらず、泣き言を言っていた自分をカリスは恥ずかしく思ったのだ。

そしてカリスは自分を見つめなおし、剣崎の面影に頼らず、一人でも戦うと改めて決意した。

「…ありがとう、睦月。休んでろ。」

「はい…」

カリスはアスファルトの上に睦月を寝かせると、再びカリスアローを構え、ウルファンデッド達を睨んだ。

そして「ヌン！」と叫ぶと、標的に向けて一斉に走り出す。

ウルファンデッドはワーウルフ達をカリスに立ち向かわせたが、カリスは圧倒的な力を発揮し、ワーフルフ達を瞬時にすべてカリスアローで切り伏せた。

カリスの融合係数が上がり、戦闘能力がアップしたのだ。

仮面ライダー達はエースアンデッドとの融合係数により、戦闘能力が上下するのだ。

融合係数は怒り、悲しみなどの感情により上下する。

今回のケースは睦月を傷つけられた怒り、そして今までの自分を反省し、新たな決意をしたことにより融合係数が上がったのだ。

ワーウルフ達をたたき伏せたカリスは次にウルファンデッドに立ち向かい、カリスアローを振るって敵を切り刻んだ。

カリスの速さはウルファンデッドを上回り、一撃、また一撃と剣戟を敵に叩き込んでいく。

「馬鹿な…何故…」

ウルファンデッドは突然のカリスの反撃に戸惑い、その勢いに押されて地面に叩きつけられた。

これを好機と見たカリスはカリスラウザーをバツクルから取り外してカリスアローにセットし、アローを醒弓モードに変形させた。

そしてラウスバンクから「フロートドラゴンフライ」「ドリルシエル」「ホークトルネード」の三枚のカードを取り出し、ラウスする。

「float…drill…tornado…spinning
dance！」

カリスラウザーから電子音声が響き、カリスの体が竜巻に包まれて宙に舞い上がる。

そのままドリルのように高速で回転し、ウルファンデッドに向けて蹴り込んだ。

カリスの必殺技の一つ「スピニングダンス」だ。

スピニングダンスは起き上がったばかりのウルファンデッドを直撃し、必殺キックを受けたウルファンデッドは再び硬い地面に倒れて爆発し、バツクルが開いた。

カリスはプロパーバンクのカードを取り出すと、ウルファンデッドに向けて投げた。

カードはウルファンデッドに突き刺さり、ウルファンデッドはカードに吸い込まれて狼の絵柄がカードに描かれる。

カリスは戻ってきた「フュージョンウルフ」のカードをキャッチし、ラウズバンクにしようと、スピリットヒューマンのカードをラウズして始に戻り、寝ている睦月に近づいた。

「ち！つまんねえな。」

それを見ていた禍木は唾を吐き、志村、三輪と共にその場から去っていった。

始は睦月のそばに来ると、自分の手を差し出した。

「大丈夫か？」

「ありがとうございます。」

睦月は始の手をとって立ち上がると、何かを決意し、始の瞳をまっすぐと見た。

「何だ？」

「相川さん…俺も戦います。」

「何だつて？」

始は表情に驚きを表した。

睦月はもう戦いとは関係ない一般人である。

この件に深くかわるのには好ましくない。

それにもう、睦月はレンゲルには変身できないのである。

「だが、お前はもうレンゲルには…」

「レンゲルにはなれないならなれないで、俺なりに相川さんをサポートします。やっぱり俺も就職活動なんかしてられない…俺も何

か、何かしたいんです！」

睦月の目には強い決意が宿っていた。
四年前と同じ戦士の瞳だ。

始はそれを見てフツと笑うと、睦月に手を差し出した。

そうだ、変身出来るか出来ないかなど問題ではない。

問題は、人々を守る意思があるかどうかである。

剣崎ならそう言うだろうと、始は密かに思った。

「…分かったよ。頼んだぞ、睦月」

「はい！」

始と睦月は共に微笑み、硬く握手を交わした。

オレンジ色に染まる空には、二人の新たな決意と友情を称えるように、夕日が暖かく輝いていた。

：

それから数日後の朝、日本に向かう船に密航という手段を持って乗り込んだ剣崎が、日本へと到着した。

「帰ってきた…三年ぶりの故郷だな…」

剣崎は久々の故郷に懐かしさと哀愁を抱いていた。

本来なら、絶対に戻ってきてはならない友人達が住む愛する故郷…

そんな故郷に、二度目の帰還を剣崎は果たしたのである。

それは中東で人々を襲った白いローチ達の謎を解明し、何が起きているかを確かめるため…

剣崎が再び、戦士に戻る時がやってきたのである。

今、運命の歯車が音を立てて回り始めた…

この先に待ち受けるのは生存か？破滅か？極限の中でその力が全開

していく…

そして、この戦いの鍵を握る運命の切り札は？

仮面ライダー剣^{フレイド}の、新たな物語が幕を開けたのであった…

第2話（後書き）

今回はまんま元の話の展開をちょっとだけいじっただけです。
楽っちゃ楽ですが良いのかどうかはわかりませんですハイ。

第3話

本に到着した剣崎は、徒歩で自分がかつて居候していた白井虎太郎の家へと歩いていった。

虎太郎の家は元々は牧場であつたために広い庭を持ち、その敷地内に建てられていた邸宅も、古いとはいえ中々大きく、洒落たデザインの家であつた。

そこではいつも虎太郎の好物であり、愛飲していた牛乳の空瓶を片付ける手伝いをしていたことを剣崎は今でも覚えてる。

何でこんなに大量に飲むのか…そしてなぜあれだけ牛乳を飲んで腹を壊さないのかが疑問であつた。

そして虎太郎は科学専門のノンフィクションライターを目指していて、その題材に仮面ライダーを使いたいため、取材させて欲しいと戦闘後に煩く頼み込んだのが彼との出会いだつた。

最初はなんて煩い奴なのだろう厄介に思っていたが、取材を受けるという約束とはいえアパートを追い出された自分に家を提供してくれたのは彼であり、また、自分が困難に直面した時に親身になってくれたのも虎太郎である。

血気盛んな性格が災いして友人を上手く作れなかつた剣崎にとって、虎太郎は大事な友達なのだ。

そして、もう一人思い出すのが、広瀬菜というBOARDの女性スタッフである。

菜はローカストアンデッドの襲撃でBOARDの三つ目の本部が壊滅した際、ついでとばかりに虎太郎の居候になつた。

ルックスはそこそこ良く、中々大きなバストが男性の目を引く女性であつたが、いかんせん気が強く、腕っ節も優れていたため、剣崎と虎太郎は彼女にだけは敵わなかつた。

だが気の強さの中にも脆い一面も持ち合わせており、自分の父、広瀬義人が病で死んだ母を助けるため、不死の秘密を解明するために

アンデッドを解放してしまったことを知った時は父が犯した罪の重さに苦しんだ。

アンデッドの細胞を元に開発された改造実験体・トリアルBが父の姿に変身し、今度こそ不死の秘密を得るために剣崎をジョーカーにしようとする度にも剣崎を狙った時も、戸惑いと父の姿が使われた怒りを隠しきれなかった。

だが、父の犯した罪を償うためにも、辛い気持ちをバネにしてライダーのサポートを行い、アンデッドと戦うこと。

そして、トリアルBに父が託した本当の思いを知ることによって、剣崎達と同じように強くなっていた。

剣崎が白井邸に向かっていたのは、彼らの姿を一目でも物陰で見守りたかったからであった。

虎太郎と栞に最後に会ったのは、三年前、カメレオンアンデッドが何らかの方法で解放され、それを封印するために戦った時である。

別れていたのはあの時はまだ一年と少しとはいえ、剣崎が来てくれることを確信し、ブレイバツクルとラウズアブゾーバーをBOARDから持ってきてくれていた時には、二人の機転に驚いた。

同時に、二人が自分を信頼してくれたことがとても嬉しかった。あの時は辛さを忍ぶため、何も会話せずに皆の元を立ち去った。

だから本当は会わない方がきつと気持ちは楽なのだが、剣崎はどうしても友の姿を見ずにはいられない自分のメンタリティを呪った。

白井邸には虎太郎が居る…可能性は限りなく低いが、もしかしたら栞もまだ住んでいるかもしれない。

一目でいいのだ…二人の元気な姿をこの目で見たい…

そんな希望を抱きながら、剣崎は広大な白井邸の入口まで辿り着いた。

しかし…

「嘘だろ…」

広大な庭を持つ白井邸の入り口には、巨額の値段が書かれた看板が立てられ、剣崎が以前下宿していた大きな家は人の気配が全く無かった。

どうみても土地共々売却されているのである。

「どういうことだよこれ…」

剣崎は困惑したが、とりあえず庭に入り、白井邸に行ってみることにした。

：

剣崎はリビングに入ると、ソファーに座り、持っていたビニール袋を座卓の上に置いた。

白井邸は家具が残っていたが、電気が止められており、明かりがつかなかった。

ガスも止められていたために料理も出来ず、持っていた僅かな日本円を使い、コンビニで買ってきた弁当と飲み物を夕食にすることにした。

「虎太郎は何処にいったんだ…それにしても、懐かしいな。」

剣崎は僅かに微笑みながら白井邸のリビングを見渡した。

電気は止められているものの、家具のほとんどが残った白井邸は四年前のままだった。

剣崎はここで仲間の白井虎太郎、広瀬菜と共に過ごし、この家を根城にしてアンデッドと戦ったのだ。

当時の雰囲気があるまま残るこの家からは、耳を澄ませば虎太郎や菜の声が聞こえてきそうだった。

「虎太郎、広瀬さん…二人とも元気かな？」

剣崎は脳裏に二人の笑顔を思い浮かべ、瞼を閉じた。二人の姿を見ることはできなかったが、当時の雰囲気が残る場所にいれるだけで剣崎は幸せだった。例えこれが、一時の安らぎに過ぎなかったとしても…

…
翌日の午後、始と睦月はハカランダで食卓に着きながらアンデッドへの対策を論じていた。

そしてそこにはかつての自分達の仲間、広瀬栞の姿もあった。

「でもすみません広瀬さん、広瀬さんの仕事もあるのに…」

睦月は栞に頭を下げた謝罪した。

栞はBOARDには戻り、新世代ライダーのバックアップを行っていた。

だが彼女は睦月が自宅まで協力を頼みに来た際、快く協力を承諾してくれた。

栞は謝る睦月に微笑むと、テーブルの上で両手を組んで口を開いた。

「何言ってるのよ。他ならぬ昔の仲間の頼みだもの、断る理由なんか無いわ。」

「でも…」

「それに…！」

栞は新世代ライダーたちの事を思い出し、うつむいて握り拳を作ると、それを思い切りテーブルに叩き付けた

「私あいつら嫌いなものよ！偉そうにふんぞり返って！この前なんか役立たずって言ったのよ！だったらあんたらのサポートなんかこつ

ちから止めてやるわよ！あゝ！腹立つ！」

睦月と始は怒り狂いながらグリグリと拳を握り締める栞に呆けながら、自分達のコーヒーを飲んだ。

…
その頃、剣崎は旧白井邸を出、街のネットカフェに繰り出していた。あの白いローチに関係することを調べるためである。

仮面ライダーは圧力によって公の場からは存在が隠されていたものの、ネット上ではその戦いの目撃情報から都市伝説となっていた。なのでローチ達の目撃情報なども転がっているのではないかと考え、ネットカフェで情報を集めていたのだ。

しかし、ローチの情報は見つからなかった。代わりに見つかったのは剣崎にとってそれよりも恐ろしい情報であった。

「これは!?!」

ネットカフェの個室でパソコンを操作していた剣崎は椅子から立ち上がり、思わず声を上げた。

剣崎が見つけた情報は、様々な生物の姿を象った怪物達の目撃情報や、携帯やデジタルカメラで撮影した画像であった。

その怪物達の正体こそ、今や自分の同類である様々な生物の始祖達「アンデッド」である。

…
ネットカフェを出た剣崎は、一人街を歩いていた。

剣崎の頭の中は今アンデッドの事で一杯だった。

なぜ封印した筈のアンデッドが解放され、再び暴れ始めたのか？

三年前カメレオンアンデッドを解放した誰かがまた愚かなミスを犯

したのだろうか？（剣崎は橘がカメレオンアンデッドを解放した事を知らない）

分からないことだらけであったが、唯一分かることはローチが言った言葉の意味であった。

ローチは日本で新たなバトルファイトが始まる。だから貴様も来いと言っていたのだ。

だが、あのローチ達がなぜ出現し、誰が奴等を操っているかはまだわからない。

そして自分が見つけた目撃情報の中には、仮面ライダーの情報もあった。

始達の事であろう。

自分も日本に来た今、彼らと力を合わせなければならぬ。

だが：始達と接触する踏ん切りは付けられなかった。

アンデッド達が再び解放された今、自分と始が会ってもまだ闘争本能は抑えられる。

だが自分達二人以外のアンデッドが全て封印されたとき、ジョーカーの闘争本能が掻き立てられ、二人のジョーカーは最後のバトルファイトを始めてしまう。

そしてどちらが勝ったとしても、世界の滅びが始まる。

自分と始は決して会うわけには行かないのだ。

「どうすればいい…俺は一人で戦えるのか…？」

黒幕はローチまで操り、今またアンデッドまでが活動を再開している…

仲間に頼らず、自分一人で戦うことができるだろうか？

剣崎は不安を拭うことはできなかった…

そんな時、剣崎は行列が出来ている一軒の本屋を見つけ、立てられていた看板を見て足を止め、目を大きく開いた。

「あれは…！」

その看板には「大作家！白井虎太郎サイン会！」と金ぴかの文字で書かれていたからである。

…

「ふう…はい、どうぞ。」

「ありがとうございます！」

虎太郎のサインを貰った来店客は虎太郎に大声で礼を言い、彼の前を去って次の来店客へと交代する。

虎太郎はまた手馴れたペン使いでサインを書き、また来店客が次の来店客へと交代する。

彼は次々にサインを書いていくが、やはりこれは本当の自分じゃないと感じていた。

自分のファンにサービスすることは本当に素敵なことだと思っているが、何かがやはり違う。

虎太郎は今の自分に虚脱感を抱いていた。

そんな虚脱感に悩まされながら次の来店客にサインをしようとしたが、今順番が回ってきている客人は中々色紙を差し出さない。

「あの…どうしたんですか？」

虎太郎は客人の顔を見上げた。

だがその客人の顔を瞳に映した瞬間、虎太郎はペンを落とした。

「久しぶりだな。」

客人は自分の友人であり、自分が書いた本の主演の一人である青年、剣崎一真であったからである。

「虎太郎。」

「剣崎君……」

虎太郎は椅子から立ち上がり、まっすぐにどこか悲しげに笑いかける剣崎を見つめた。

そしてそんな剣崎の顔を見ていると、懐かしさで目じりが熱くなった。

「剣崎君……剣崎君！」

虎太郎の目からはとうとう涙が溢れ出し、テーブルの上に向かってから剣崎の胸に飛び込んだ。

「ちょ……おい虎太郎！」

「うわああああん！剣崎君久しぶりいいいいいい！！」

虎太郎が剣崎に抱きついた瞬間、来店客達は混乱し、小規模なパニックが起きた。

…

とりあえずサイン会を終えた虎太郎は剣崎を連れて行きつけの高級レストランの窓側の席に座り、料理とワインを注文をした。

虎太郎は嬉しそうに笑いながら剣崎を見ると、陽気に話しかけた。

「それにしても剣崎君、ほんつとうに久しぶりだね！」

「ああ、俺も会いたかったよ。」

「今まで何処に居たの？何してたの？」

「中東に行ってたよ。そこで、内戦に苦しめられてる人達を助けた。」

「そうか… 剣崎君らしいね！」

剣崎と虎太郎は友人らしく心を許しあった会話をし、心を和ませていた。

久しぶりの友人との再会…

暫く離れていた間、剣崎も虎太郎も今この時間を本当の至福の時間だと思っていた。

寂しい旅路を続けてきた剣崎も、豪勢だが自分を偽り続ける虚脱感を日常に感じていた虎太郎も、この時だけはあの時間に戻れている気がしたのだ。

厳しくも充実していた時間だった、あの四年前の日々…

そして丁度空腹となってきた頃、注文した高級料理の数々が運ばれてきた。

ステーキ、ロブスター、その他豪華な食材を使った料理の数々と、ビンテージ物のワインが食卓に並ぶ。

剣崎はナイフとフォークを使ってステーキを切り、口に運ぶと、その上品な味に舌鼓を打った。

ここ数年、これほど味の濃い物は食べていなかった。

剣崎は日本を離れて戦地に行った時、実際に戦地に近い場所に住む人々の食生活を体験して驚きを隠せなかった。

テレビを見て、貧しい国の食生活が厳しいことは頭では分かっていたが、実際に体験してみると厳しい現実を生きる人々の姿に身を切られるような思いを味わう。

改めて日本に生きる人々の食生活の贅沢さを、剣崎はこの時肌で感じた。

一方、虎太郎はグラスにワインを注ぐと、慣れた動作で匂いを楽しんでから酒を飲み始めた。

剣崎はそんな虎太郎に違和感を感じると、ナイフとフォークを止めて彼に話しかけた。

「お前、そういえば牛乳はどうしたんだよ牛乳？」

四年前、虎太郎と言えば牛乳というほど彼は牛乳が大好きだった。それが今やワインなど、当事者から見れば違和感を感じずにはいられない。

「嫌だなあ…飲むんらやっぱワインでしょ！ま、ビンテージ物に限るけどね。」

虎太郎は剣崎の質問に少し嫌味な喋り方で答えた。

剣崎は眉を潜め、ナイフとフォークを置くと、少し呆れ気味な口調で言った。

「お前しばらく見ないうちに…嫌な奴になったな…」

「…やっぱり、そう見えるかな。」

それを聞いた虎太郎は寂しげな目をし、グラスをテーブルに置くとうつむいて頬杖を付いた。

「虎太郎…悪い、言い過ぎたか？」

「うつん、良いよ。僕さ、急に本が売れて、皆にちやほやされて、悪い気分じゃないんだけどさ、充実感が感じられないんだ。」

「なんかさ…今の自分は本当の自分じゃない気がするんだよねえ…」

「…そっかあ。」

虎太郎も虎太郎で、苦勞しているのだと剣崎は思った。

確かに四年前のアンデッドとの戦いは強烈に皆の記憶に焼き付いている。

あんな経験をした後だと、何をしても充実感を感じられなかったり、思い出が強すぎて上手く世渡りが出来なかったりもするかもしれないな

い。

剣崎自身、四年前、アンデッドと戦っていたところが一番幸せだったと、不謹慎ながら思っていた。

戦いを避けるためにアンデッドになりながら、戦っていたところが幸せだったと感じる…

悔しいが、自分は戦士なのだとの心の底から剣崎はそう思った。

もしも戦いが終わった後、清掃員でもやれていれば清潔な心で新しい人生を歩みだせたのだろうか？

勿論、今の自分に後悔などしてないし、自分が得た力で守れるものを守っていければいいと、もう心に誓ってはいるが。

「そついえば剣崎君、僕の書いた本読んでないよね？えっと…」

虎太郎はスーツの懐に手をつまむと、ブレイドの写真が表紙に印刷された本「仮面ライダー」という名の仮面」を取り出し、剣崎に渡した。

「それ、僕が書いた本なんだ。読んでみてよ。」

「ああ、分かった。」

剣崎は本を開き、懐かしむように読み始めた。

本には始のことについてはあまり詳しく書かれていなかったが、ライダー達の戦いの記録がほぼ詳細に書かれていた。

戦えない人々の分まで戦うと決意し、武器であるカードが一枚も無い状態で戦って勝利したブレイドとコーカサスビートルアンデッドの戦い。

他のライダー達と対立を繰り返し、人間とアンデッドの狭間で苦しみながら、その中でブレイドと友情を結んだカリスの物語。

愛する人を殺され、相討ち覚悟で激戦を繰り広げたギャレンとピーコックアンデッドの決戦。

邪悪な意思から自分を救おうと身を犠牲にしたタランチュラアンデッドと、自分と心を通わせたタイガーアンデッドの力を借り、スパイダーアンデッドの支配に打ち勝ったレンゲルの復活劇。

その他にも数々の戦いが本には記されていた。

剣崎は本を読み終わると、ぱたりとそれを閉じ、テーブルに置いた。

「いいじゃん虎太郎！いろんなこと思い出しちゃったよ！」

「ありがと、その本あげるよ。剣崎君には一番献本したかったんだけど…居なくなっちゃったからさ…」

「ごめん…」

虎太郎は剣崎の謝罪を、「いいよ」と笑って許した。

そんな時、外から人々の悲鳴が聞こえ、剣崎達は驚いて窓から外を見た。

「あれは!?!」

剣崎は目を見開いた。

窓の外にはスピードのカテゴリA・ビートルアンデッドが出現し、その剛力で人々を襲っていたのだ。

「どういうことだよ剣崎君！全部封印したんだろ!?!まさか、最近ネットで回ってる目撃情報って…」

「間違いない…誰かがアンデッドを開放したんだ!しかもあれはスピードのカテゴリA…俺は奴を封印したカードを使って…プレイドに変身していたんだ!」

剣崎は椅子から立ち上がると、大急ぎで店外に駆け出しに行き、虎太郎も彼の後に続いた。

…
ビートルアンデッドは周囲に居た人々を捕まえては殴り、首を絞めて首の骨を折る等を繰り返して命の灯を残酷に消していく。

劍崎はそんなビートルアンデッドの前に立ちはだかると、ジョーカーに変身し、オールオーバーをその手に召喚した。

ビートルアンデッドは「ジョーカー…」と古代語で呟くと、自分自身の手にもオールオーバーを召喚した。

オールオーバーはビートルアンデッド及びコーカサスビートルアンデッドの武器でもあるのだ。

ジョーカーとビートルアンデッドはお互いの剣と剣をぶつかり合わせて剣戟戦を繰り広げる。

剣と剣が火花を散らす激しい戦闘ではあったが、戦闘能力はジョーカーの方が上の為、すぐにビートルアンデッドはジョーカーの攻撃によって追い詰められた。

窮地を悟ったビートルアンデッドは何かを呼ぶように雄叫びを上げると、ビートルアンデッドの後ろから三体のアンデッドが出現した。ローカストアンデッド、ディアアンデッド、ジャガーアンデッドの三体である。

三体の下級アンデッド達は群れを成してジョーカーに襲い掛かったが、弱いアンデッドがどれだけ集まったところでジョーカーにはかなわず、攻撃を次々にかわされ、瞬時にオールオーバーで切り裂かれた。

切り裂かれたアンデッド達はプライムベスタと化し、ジョーカーの手に収まると、ジョーカーは再びビートルアンデッドを睨んだ。

ビートルアンデッドはその眼光に恐怖を抱き、ジョーカーに背を向けると、一目散に逃亡した。

ジョーカーはすぐにビートルアンデッドを追おうと思ったが、その寸前、虎太郎の叫び声が耳に届いた。

「劍崎君！あれ！」

ジョーカーはすぐに、虎太郎の方に視線を移す。虎太郎はビートルアンデッドが逃げた方向とは別の方角を指差しており、ジョーカーは虎太郎の示す方向に視線を移すと、驚いて一歩足を踏み出した。

そこには剣崎と虎太郎も見たことが無い三人のライダーの姿があったのだ。

「あれは…」

ジョーカーは困惑した。

あの三人はカリスでもギャレンでもレンゲルでもない…

変身ベルトを見るとレンゲルのベルトに似ているが、中心に刻まれているのはクラブではなく、「A」のマークー文字だ。

三人共、本当に初めてみるタイプの仮面ライダーである。

その内の一人、緑色のライダーが、中心の金色のライダーに向けて話しかけた。

「見ろよ志村、ジョーカーだぜ。」

次に女性のように細身のスタイルをした赤いライダーが、金色のライダーに話しかける。

「カリスになっていない所を見ると、相川始じゃない…純一、もしかしてあれがアンデッドを解放したもう一体のジョーカーじゃ…」

最後に、金色のライダーが、まるで仲間の指揮を取るように言葉を発した。

「可能性は高いな。禍木、夏美、ここでジョーカーを封印するぞ！」

三人のライダーは剣、槍、弩の各々のラウザーを取り出し、それを構えると、ジョーカーに向かって襲い掛かってきた。

白いローチと再び解放されたアンデッド…それに謎の仮面ライダー…多くの謎が剣崎へのしかかかっていく…

全ての謎の答えを運命に求めるように、剣崎は叫び、問うた。

「何者なんだお前達は…一体何が起きてるんだ!？」

第3話（後書き）

広瀬さんとニーサンの人は引退しちゃったけどブレイドの続きやるんなら頼まれたらやってくれるよね。

…くれるよね？

ニーサンネタをやりまくってる黒田さんと比べると広瀬さんの中の人は難しそうだなあ…

でもオリキャラなんて物を出すよりは広瀬さんを出した方が二次創作はいいですよね。

第4話

グレイブ…ラルク…ランス…

三人の新たなライダー達は自分達のレーザーを構え、剣崎が変化したジョーカーに襲い掛かった。

グレイブの剣が、ラルクの刃が、ランスの槍が息のあったコンビネーションで次々にジョーカーを攻め立てていく。

ジョーカーはライダーが相手のため、力をセーブしていたものの、三人の猛攻撃に徐々に追い詰められていく。

「何者なんだお前達は…一体何が起きてるんだ!?!」

ジョーカーは状況が理解できないまま、三人のライダーの攻撃を自らの剣で受け止め、防御していくことしか出来なかった。

だがジョーカーがグレイブ達に追い詰められていく中、始と睦月が現場に到着した。

「相川さん!あれ!」

「間違いない…あれは剣崎だ!」

ジョーカーの姿を見つけた二人の表情は驚愕に彩られ、眼を大きく開いた。

ハカランダに居た二人は、広瀬と共にコーヒを飲みながら待機していた。

そんな時、始がアンデッドの気配を感じ取った。

だがカテゴリーAや他の下級アンデッドのほかに、別の気配を持つアンデッドの存在も始はキャッチした。

その気配は自らの正体であるジョーカーと全く同じ感覚を持ち、さらに懐かしさがその中に含まれていた。

そして直後に広瀬のノートパソコンに入っていたアンデッドサーチャーが反応し、A、5、6、9の四つのカテゴリーのアンデッドのほか、ジョーカーの反応まで探知された。

睦月と広瀬はそれが剣崎の物か以前BAORDを襲い、ラウズカードを奪ってアンデッドを解放した三体目のジョーカーの物か迷ったが、始は感じた懐かしさからそれが剣崎だと確信した。

そして現場に到着すると、三年前に自分達の前に現れたのと同じ、剣崎が変化した始と全く同じ姿を持つジョーカーが、新世代ライダー達に襲われている所を発見したのだ。

「志村達…あれが剣崎さんだって知らないんだ！」

「剣崎…やめろおおおおおおおおお！！！」

始はチェンジマンティスのカードを取り出し、腰に出現させたカリスラウザーにラウズすると、カリスに変身し、ジョーカーの救援に向かった。

「剣崎！！！」

カリスは三人のライダーに殴りかかり、ジョーカーから引き離すと、ジョーカーを守るように彼の前に立ち、三人を睨んだ。

「始！？」

「大丈夫か剣崎！？」

カリスはジョーカーの方に顔を向けて彼の無事を確認すると、再びグレイブ達に視線を移す。

「貴様ら…何のつもりだ…！！」

「それはこっちの台詞だぜ。」

「そいつはアンデッドを解放したジョーカーよ！邪魔するならアンタも封印するわ！」

「所詮貴方もアンデッド…信用なんて出来ませんね！」

三人は再びラウザーを構えると、次はカリスをターゲットに変えて再び襲い掛かった。

カリスはカリスアローを召喚し、三人のラウザーの刃を防御すると、その俊敏な動きでグレイブ達に応戦した。

旧世代の中でも最高クラスの実力を持つているカリスは、敵が三人でも劣勢にはならず、互角に戦いを進めていく。

だがやはり一対三の戦いでは分が悪く、カリスは徐々に三人の攻撃に捉われていった。

共同運用を全体に開発された新世代ライダーたちのコンビネーションは完璧で、彼らはこれを武器にして多くのアンデッド達を難なく倒してきたのだ。

やがてグレイブの突きがカリスの胸部にクリーンヒットし、カリスは硬い路面に叩き付けられた。

「始！」

ジョーカーはカリスを助けに向かおうと思ったが、足元にラルクがガンモードに変形させたラルクラウザーから放ったエネルギー弾が命中し、邪魔をされた。

「次はテメエの番だ！」

ランスの怒号と共に新世代ライダー達は再びジョーカーを標的とし、ジョーカーに向けてダッシュで迫る。

「やるしかないのか…！」

ジョーカーはオールオーバーを握り締め、渋々彼らに応戦することを決め、彼らに向けて走った。

人間が変身したライダーと戦うつもりはないが、ここで倒されるわけにはいかないのだ。

だが戦う決意をしたジョーカーと新世代ライダー達が激突する寸前、「待て！」という叫びが周囲に響いた。

ジョーカーと新世代ライダーは反射的に足を止め、戦いを見ていた睦月、虎太郎、そしてカリスと共に声が聞こえた方向を振り向く。

彼らが見た場所は石段の上で、そこには黒いスーツとサングラスを身につけた橘朔也の姿があった。

「久しぶりだな剣崎、会いたかったよ。」

「橘さん……」

ジョーカーは変身を解き、剣崎に戻って橘の名をつぶやいた。

カリスや新世代ライダー達も変身を解除すると、橘の方を見た。

そして剣崎は一步身を乗り出すと、大きな声で言った。

「これは一体どういうことなんですか！？それに……」

剣崎は志村達新世代ライダーの方を振り向き、彼らが持ったバックルを睨む。

「こいつらは……このライダー達は一体何なんです！？それに……何でアンデッドが！？何か言ってください……！！」

橘は暫く剣崎を見つめた後、背を向けると、「ついて来い。」と言だけ言った。

とりあえず何が起きているのかを知るため、剣崎は納得はまだ出来

なかったものの、橘に従うことにした。
虎太郎、始や志村達も剣崎と橘に続き、後を追った。

…
橘が案内した先は、海辺の断崖絶壁の付近に作られた新しいBOA RD本部だった。

剣崎達は様々なセキュリティを解きながら本部の通路を歩く橘に続いて歩いていると、橘は淡々と喋り始めた。

「四年前：ジョーカー以外の全てのアンデッドを封印し、我々のライダーとしての戦いは終わった…いや、終わった筈だった…」
「筈だったって、どういうことなんです!」

剣崎は声を荒げて橘に聞いた。
橘はそのまま淡々とした調子で話を続ける。

「新たなアンデッドが一体出現したんだ。三体目のジョーカーがな。」
「!?、俺と始の他に、ジョーカーがもう一体…」
「そしてこの本部を襲い、烏丸所長に重傷を負わせて研究に使っていたカードを奪い、その大半を再び解放してしまっただ。レンゲルとブレイドの変身に必要なカテゴリーAも含めてな。」
「所長は…所長は大丈夫なんですか!？」

剣崎は橘の肩に手を置き、烏丸の安否を聞いた。
剣崎にとって烏丸は自分をライダーに選んでくれた恩人である。
彼の無事を気にするのは当然である。

「所長はここから少し遠くの病院に入院している。後から会いに行つてやつてくれ。…話を戻すぞ。クラブのAが解放されたために、

睦月は戦えなかった。ハートのAとダイヤのAだけは無事だったが、俺は所長の代理をしなければならぬから前線には立てず、始だけでは手が足りなかった…」

「という訳で、今は私達が仮面ライダー。」

三輪が橘の会話に割り込んで言った。

橘は足を止めて志村たちのほうに振り向くと、途切れた話を再開した。

「改めて紹介しよう。志村純一、禍木慎、三輪夏美君だ。」

「宜しく、そしてさよなら。」

三輪は剣崎を馬鹿にしたような笑みで笑うと、剣崎は「な!？」と声を漏らした。

すると三輪の横から志村が割り込み、剣崎を見て言った。

「よせ夏美、お年寄りはいたわるべきだ。」

次に禍木が剣崎に歩み寄り、イラついた眼差しで剣崎を睨みながら口を開いた。

「言つとつけどな、最強のアンデッドだかなんだか知らねえが俺達の邪魔だけはすんなよ?分かったな?」

剣崎は三人の悪質な態度に戸惑いながらも、中東で襲ってきたローチの背後にいる者が分かった。

あれは三体目のジョーカーからの刺客だったのだろう。

新たなジョーカーもアンデッドなら、自分を倒そうとするはずである。

その為に刺客を利用し、自分が根城にしている国…日本に標的を呼

び寄せたのだ。

「（三体目のジョーカーは俺をおびき寄せするために自分の手下を中東に送ったんだ…許せない！あのローチのせいで何人も罪のない人々が…何処だ…そのジョーカーは何処にいるんだ…？）」

剣崎はまだ見ぬ敵を前に気を引き締め、唇をかみ締めた。

…

橘から一通り話を聞き終えた剣崎は、虎太郎と共に始と睦月によってハカランダに招かれた。

「剣崎君！」

「広瀬さん！」

そこで栞と再会した剣崎は硬く握手をし、再会を喜んだ。

そして次に睦月の方を向くと、近づいて彼の肩に手を置いた。

「さつきは話せなかったけど、睦月も三年振りだな。」

「お久しぶりです剣崎さん。あの時はありがとうございました。」

睦月はカメレオンアンドレッド戦の事を思い出し、剣崎に礼を言った。そして最後に始の方を見ると、深刻な顔つきで口を開いた。

「始…」

「剣崎…会えて嬉しいぞ。」

「…ああ、俺もだ。さつきはありがとう。」

剣崎も始もお互いの再会を喜んだが、その心中は複雑だった。本来なら戦う運命が定められた二人はもう出会ってはならない。

それが新たな脅威を拭い去るため、再び出会ってここにいる。剣崎も始も嬉しさ半分、複雑さ半分で喜んでばかりいられないのだ。それに、長くここに居ればまた仲間達と別れるのが辛くなる。剣崎は名残惜しそうに、仲間達に背を向けた。

「ちよつと剣崎君！何処行くのさ!？」

虎太郎は慌てて剣崎を呼び止めると、剣崎は振り向いて口を開く。

「悪いけど、俺は皆と一緒ににはいられない…アンデッドや三体目のジョーカーとは、一人で戦うよ。」

「そんな…水くさいですよ剣崎さん!」

睦月も剣崎を引きとめようと、一步身を乗り出してそういった。

しかし、剣崎は寂しげな笑顔で首を振り、次に始と視線を合わせた。

「俺が居ると、いつ何が起こるか分からない。俺と始は…ジョーカーなんだ。」

始も唇を噛み、嫌でも自分達の立場を思い知った。

剣崎と始はジョーカーである。

今はアンデッドが解放されているものの、いつ、どんなタイミングで闘争本能が掻き立てられ、バトルファイトを始めてしまうかわからない。

そうなれば、世界の破滅が訪れてしまう。

そして剣崎は、仲間達全員の顔に交互に視線を合わせ、話を再開する。

「それにさ…皆と一緒に居ると辛くなるんだ。俺は、いつまた皆の前から居なくなるか分からないからさ。寂しい思いはしたくないし、

させたくもない。」

剣崎の言葉に、皆が俯き、沈痛な表情に染まっていく……だが剣崎は、すぐまた笑顔に戻り、皆を諭すように口を開いた。

「大丈夫！今の内なら二度と会えないわけでもないしさ、会おうと思えばいつでも会えるさ！じゃあな、始、睦月、虎太郎、広瀬さん。久しぶりに皆の顔が見れて嬉しかったよ。」

剣崎は仲間達に別れを言うと、店を出て行った。

虎太郎は去っていく剣崎の後姿を見つめ、唇を強く噛んだ。

栞はそんな虎太郎の様子を察すると、彼の肩に手を置き、優しい口調で言った

「大丈夫よ白井君。また会えるわ。」

「……うん。」

始と睦月もまた、悲しげな顔で剣崎を見送っていた。

今の自分達に、剣崎を救うことは出来ない。

同じ仮面ライダーとして、戦友に何もしてやれず、無力感だけが募っていく……

自分達はいつも剣崎に助けられてきたのに、剣崎には何もしてやれない。

それが何より齒がゆかったが、今の二人にその無力感を拭う術はなかった……

第4話（後書き）

短かったでしょうか？次回はブレイド復活まで行く予定です。

第5話

始達と別れてから数日後、剣崎は東京の街中を歩いていた。一刻も早く敵を探し出して倒す為、朝から街を歩いてアンデッドや白いローチを探していたのである。まだアンデッドの気配も、白いローチの気配も察知できておらず探すといっても暗中模索の状態である。だが例え気配で探知できなくても、人を襲う彼らをほっつておくわけにはいかないのだ。

「アンデッドもローチ達も…一体どこに居るんだ…？」
「剣崎さん？」

そんな剣崎の耳に、背後から声が聞こえ、ふと振り向くと、そこには一人の少女の姿があった。その少女は十代半ばほどの外見で、年相応の洒落た服を身に纏い、長い髪をポニーテールにして束ねていた。剣崎はすぐにそれが誰か分かった。その少女は剣崎の知り合いであり、年月と共に外見は少し大人びてはいたが、顔立ちは当時とあまり変わっていないからである。

「天音ちゃん!？」
「やっぱり剣崎さん!久しぶり!」

少女の名は栗原天音。

自分の友人の姪であり、始の守るべき大切な少女であった。

…
天音と再会した剣崎は、彼女と共に街路を歩いていた。

三年前の事件の時、剣崎は天音の顔だけは見れなかった。

あの時天音は母である春香と共にハカランダから避難した後であり、会う機会がなかったからである。

だから、これは彼女との四年ぶりの再会であった。

「でもホント久しぶりね。剣崎さん今まで何処にいたの？ 始さんも知らないって行ってたし…」

天音は十歳の頃と変わらない無垢な瞳で剣崎を見上げ、聞いてきた。剣崎はどう答えるか少し悩むと、「人助けの旅だよ。ライダーの仕事が終わったから、今度は自分の力で世界中の人々を助けようと思つてね。」と答えた。

始がカリスであることも知らない彼女に自分がどうなったかを教えることは出来ない。

「へえ… かつこいいじゃん。流星は仮面ライダーね。でもなんで始さんや虎太郎にも話してなかったの？」

「あはは… その… 会ってから行くと別れが辛くなるからさ…」

剣崎は天音から目を逸らし、苦笑いした。

天音は次に何か思い出したように「あ！」と声を漏らすと、再び剣崎に笑いかけた。

「そつだ！ もうすぐ私の誕生日なんだけど、剣崎さんも来てくれるよね？」

「え…」

剣崎はそれを聞いた途端、目を丸くして呆けた。

天音はそんな剣崎の様子も気にせずバタバタと喋り続ける。

「来ないなんてゆるさないわよ。剣崎さん、四年前の私の誕生日の時「プレゼントは今度あげる」って言うつといて結局約束守んなかったんだから！」

あの時の約束、今度はちゃんと果たしてよ！」

「うう…」

剣崎は低い呻き声を出し、そうだった…と剣崎は四年前の出来事を思い出した。

天音の誕生日を忘れていた剣崎はパーティー用の服とプレゼントが用意できず、プレゼントは今度あげると天音に言っておきながら結局約束を守れないままアンデッドになり、渡米したのだ。

「剣崎さん！来・て・く・れ・る・よ・ね!？」

「…分かった！行く！行くよ！」

剣崎は以前の約束もあるせいで断れず、仕方なくOKした。

別れが辛くなるため、本当は以前の知り合いや友人達とはあまり関わりたくないのだが、剣崎の性格上あんな言い方をされれば断れない。

「良かった！始さんも喜ぶよ！」

「…うん。」

剣崎は少し戸惑いを含めた返事をし、天音はご機嫌そうに剣崎の前に乗り出して歩き始めた。

そんな時、剣崎の感覚が強く刺激され、額を押さえた。

「これは…」

それに覚えのある剣崎は、額から手を離し、急いで自分の前に居る

天音を見た。

その瞬間、空から天音の前に中東で剣崎の前に現れた白いローチ「アルビローチ」の群れが降り立った。

「きゃあああああ！！」

ローチの姿に驚いた天音は大声で悲鳴を上げ、ローチ達は気味の悪い泣き声を出しながら天音にゆっくりと近づいてくる。

「天音ちゃん！」

剣崎は急いで天音の手を握ると、彼女を連れてローチ達から逃亡した。

：

剣崎と天音は付近の倉庫街まで何とか逃げ延びた。

本当ならジョーカーに変身し、背後から迫ってくるローチを一掃したいが、自分の正体を知らない天音の前でジョーカーの姿には変身したくない。

だから今は彼女と共に逃げるしかなかった。

だが、二人を狙うのはローチだけではなかった。

ローチから逃げていた二人の前に、ビートル、スパイダー、イーグル、カプリコーン、モス、バット、ゼブラ、モール、スキッドアンデッドのアンデッド軍団が出現したのだ。

「きゃっ！？」

「クソ…こつちだ！」

剣崎は天音と共にアンデッドとローチが居ない右側の道に向けて走った。

それを見ていたスパイダーアンデッドは古代語を使い、『あの女か？』とビートルアンデッドに話しかけた。

ビートルアンデッドも古代語を使い、『そうだ。ジョーカーが狙っている。』と答えた。

その間にもローチ達は剣崎達に近づいていく。

だが剣崎と天音が倉庫街の車道に出た瞬間、三台のバイクが二人とローチの間を走り抜け、ローチ達を跳ね飛ばした。

志村、禍木、三輪の三人である。

三人はバイクを停めて降りると、ヘルメットを外し、各々の「チェンジケルベロス」のカードを取り出した。

これは以前天王寺博士がバトルファイト制覇の為に作り出したアンデッド、「ケルベロス」のカードを橘が分析し、オリジナルの黄のケルベロスから新たに赤、緑の二枚を作り出した物である。

ジョーカーすら超えた力を誇ったケルベロス：その力は三枚に分かれ、ライダーとなった今でも高い戦闘能力を誇り、スペックだけならばブレイドやギャレンを上回っている。

まさに、旧世代の歴史を塗り替える新世代の名にふさわしい仮面ライダー達であった。

三人はカードを手に持ったベルトにセットし、腰に装着すると、一斉に叫ぶ。

『変身！！』

そしてバックルを展開し、電子音声で鳴り響くと、三人の前に三色のエネルギースクリーンが現れ、それを潜り抜ける。

スクリーンを潜り抜けた三人は、志村は仮面ライダーグレイブ、禍木はランス、三輪はラルクに変身した。

三人のライダーはアンデッド軍団に蹴りこむと、ラウザーを取り出し、戦闘を開始した。

…
新世代ライダー達が武器を振るいながら、アンデッド軍団と戦う中、
剣崎は天音をつれてローチ達から逃げるために空いていた倉庫に入
っていた。

新世代達も戦いの中で倉庫の中に入り、申し訳程度にローチも倒し
てくれてはいたが、ローチ達の数は多く、アンデッドも居るため、
新世代が撃ち漏らしたローチが剣崎達に襲いかかる。

剣崎は必死に走ったが、このままではローチの毒牙にかかるのは時
間の問題であった。

天音の前でジョーカーに変身するしかないのか？

剣崎は走りながら悩んだ。

だが剣崎が決断を下す寸前、数発の光の弓矢が飛来し、剣崎と天音
を襲おうとしたローチを倒した。

剣崎は矢が飛んできた方向を向くと、そこにはカリスアローを構え
たカリスと睦月の姿があった。

「は…カリス！睦月！」

一瞬天音の前でカリスの正体を喋りかけた剣崎は慌てて言い直した。
天音はまだ始がカリスだとは知らないのだ、うっかり正体言うわ
けにはいけない。

それは、始の今後にも関わってしまう重大な事柄だからである。

剣崎はカリスと睦月に駆け寄り、二人と合流した。

「剣崎、大丈夫か？」

カリスは剣崎と天音を交互に見ながら聞いた。

「ああ！ありがとうカリス！」

「剣崎さん、俺と一緒に逃げましょう！」

睦月は剣崎と天音を連れ、倉庫から脱出した。それを見届けたカリスはカリスアローを構え、ローチ達に切りかかった。

一方の新世代ライダー達は、グレイブがイーグル、ランスがカプリコーン、ラルクがスキッドアンドッドを標的に定め、持ち前のスピーディーな攻撃で敵を追い詰めていた。

そしてそれぞれが標的にしていたアンドッドを突き飛ばすと、グレイブはグレイブラウザーのカードホルダーを展開し、ラルクとランスは腰のラウズバンクから1枚のカードを取り出した。

ケルベロスの力を攻撃用のカードに転用した「マイティ」のカードである。

グレイブは「マイティグラビティ」、ランスは「マイティインパクト」、ラルクは「マイティレイ」のカードをラウズすると、それぞれの絵柄が描かれた紋章が三人の前に現れる。

三つの紋章は三人のラウザーに吸い込まれると、三人の武器がそれぞれのメインカラーと同じ色に輝く。

そしてグレイブの必殺技「グラビティスラッシュ」、ランスの「インパクトスタンプ」がイーグル、カプリコーンアンドッドを切り裂き、ラルクのガンモードに変形させたラウザーから撃たれた「マイティレイ」がスキッドアンドッドを撃ち抜いた。

三人は倒したアンドッドに「コモンバンク」のカードを投げ、封印すると、次の標的を求め、戦いを続行した。

：

剣崎、睦月、天音の三人は、倉庫街の外に向かって走っていた。

剣崎はある程度逃げたら天音を睦月に任せ、自分は二人から離れた後ジョーカーになってカリスの加勢をするつもりだった。

だがやはり思った通りには上手くいかなかった。

アンドッドの群れから離れ、剣崎達を追っていたスパイダーアンデ

ツドが現われて睦月を殴り飛ばし、剣崎と天音をその長い爪を持った右手で地面に叩きつけたのだ。

「ぐっ…お前は…!？」

上半身を起こした睦月はスパイダーアンデッドを目にし、表情を驚愕で染めた。

スパイダーアンデッドはレンゲルへの変身に必要なカテゴリーAであり、睦月の人生を弄んだ相手なのだ。

だがスパイダーアンデッドは睦月を相手にせず、剣崎と天音の方に視線を移すと、頭にある5本の蜘蛛の足に似た突起を角の様に立たた。

「きゃああああ!！」

「天音ちゃん!」

剣崎は天音に覆い被さり、彼女を守るような体勢をとると目を閉じ、激痛と、出血して天音に正体を知られる事を覚悟した。

だが剣崎がスパイダーアンデッドの攻撃を受ける瞬間、1台の真紅のバイクが現われ、スパイダーアンデッドを跳ね飛ばした。

仮面ライダーギヤレン専用マシン・レッドランバスである。

剣崎と睦月はレッドランバスの方を振り向くと、乗っている人間の方を見た。

レッドランバスの搭乗者はマシンを停めて降り、ヘルメットを取ってハンドルにかけると、その下から現われたサングラスに隠された瞳でスパイダーアンデッドの方を睨んだ。

橘である。

「橘さん…」

剣崎は橘の姿を見ながら彼の名を呟くと、橘は自分の変身ベルトであるギャレンバックルを取り出し、ダイヤのAのカードをセットして腰に装着した。

「変身…」

橘が呟くように言いながらギャレンバックルのレバーを引くと、バックルから「ターンアップ」と電子音声流れ、橘の前にノコギリクワガタが描かれたエネルギースクリーンが出現した。

橘はそれをゆつくりと歩きながらくぐると、体にギャレンアーマーが装着され、仮面ライダーギャレンへと変身を遂げた。

以前、わざとは言えギャレンに封印されたスパイダーアンデッドは、「次は手加減しない」と言わんばかりにギャレンに飛び掛ったが、ギャレンはスパイダーの攻撃を洗練された動きで回避すると、敵の背中にカウンターキックを打ち込み、前を向いたところにはさず連続パンチを叩き込む。

そして回し蹴りでスパイダーアンデッドを蹴り飛ばすと、左手のラウズアブゾーバーからダイヤJ「フージョンピーコック」とダイヤQ「アブゾーブサーペント」のカードを取り出した。

ギャレンはアブゾーバーにQのカードをセットし、Jのカードをラウズすると、電子音声アブゾーバーから流れ、ギャレンはジャックフォームへと強化変身した。

仮面とボディは金色に彩られ、胸には孔雀が描かれた紋章「ハイグレイドシンボル」が輝き、背中には六枚の羽根が装備されたギャレンは、銃口のすぐ下に接近戦用の刃「ディアマウンテエッジ」が装備されたギャレンラウザーのカードホルダーを展開した。

ギャレンはそこから「バレットアルマジロ」「ペツカーラピッド」「ファイアフライ」のカードを取り出し、ラウズすると、羽根を広げ、宙に浮きながらスパイダーアンデッドに高速で接近し、エッジの先端を突き刺した。

そのまま上空へと飛び、引鉄を引くと、銃口から無数の炎の弾丸が放たれ、スパイダーアンドッドにゼロ距離で命中する。

ギャレンジャックフォームの必殺技「J・バーニングショット」だ。ギャレンの技を受けたスパイダーアンドッドは転落し、地面に激突すると、大きな爆音を立てて爆発に包まれた。

ギャレンはクラブAのプロパーブランクのカードを取り出し、空中からそれを投げると、カードはスパイダーアンドッドが包まれた炎の中に消え、アンドッドを封印してギャレンの手に戻ってきた。

「睦月！」

カードを手に入れたギャレンは倉庫の屋根に着地すると、そのカードを睦月に向けて投げた。

睦月はカードをキャッチすると、鮮やかなオレンジ色の背景の中に金色のクラブのマークを背中に刻まれた蜘蛛が描かれたカードをじっと見つめた。

これが「チェンジスパイダー」のカードである。

次にギャレンは「レンゲルバツクル」を取り出すと、「変身するんだ！」と睦月に言いつけ、それを再び投げ渡す。

睦月はそれもキャッチすると、自分の背後をふと向いた。

カリスや新世代達が撃ち漏らしたアルビローチ達が自分達に向けて迫っている。

睦月は表情を引き締めると、カードをベルトにセットし、腰に装着してバツクル部を開いた。

ベルトからは電子音声が流れ、金色の蜘蛛が描かれたエネルギークリーンが睦月の前に現れると、自動的に睦月に迫って彼を潜り抜ける。

そして睦月はレンゲルクロスを纏い、仮面ライダーレンゲルへと変身した。

旧世代の戦士が一人復活したのだ。

レンゲルは武器の醒杖レンゲルラウザーをその手にもつと、それを構え、ローチ達に向けて走る。

レンゲルは持ち前のパワーで杖を振るい、ローチ達を蹴散らす。同じように倉庫から出てきたカリスと新世代も、それぞれの武器を振るってローチを倒し、残ったアンデッドを封印していく。

そんな戦いを見ながら、剣崎は思った。

「できることなら俺もジョーカーではなく、ライダーに変身し胸を張って皆と一緒に戦いたい。」と…

だが、既にビートルアンデッドはライダー達の攻撃をぐりぬけ、戦場から逃げ出していた…

…
戦いの後、剣崎は始、睦月、志村達と共にBOARDの本部を訪れた。

司令室で橘はブレイバックルを保管庫から取り出し、剣崎に渡すと、鈍っていなかった睦月の腕を褒め称えた。

そして天音の保護者として本部に呼ばれていた虎太郎は両腕を広げ、歓喜した。

「旧世代と新世代のライダーの共闘！世紀の大スクープだあ！！…でも、なんなんだろ？アンデッドを解放した三体目のジョーカーの目的って？」

虎太郎がふと疑問を口にする、橘は「ついて来い」と言って剣崎達を本部の地下へと案内した。

…
橘はセキュリティを解除しながら剣崎達を地下の巨大保管室に案内した。

部屋に入ると自動的に照明が着き、暗かった室内を明るく照らす。

そして剣崎は「これは…」と声を漏らした。
剣崎達の視界には中心に穴があいた巨大な岩石のレリーフがあったのだ。

「谷川連峰で発見された超古代のレリーフだ。古代のバトルファイトに勝利した者に、偉大な力を与えるとある。始と睦月には、志村達を紹介した際に見せてある。」

橘はレリーフとレリーフに書かれた古代文字の訳をこのレリーフの存在を知らなかった剣崎、虎太郎に教えると、始は一步前に乗り出して口を開いた。

「そう、このレリーフは「フォーティーン」を封印したレリーフだ。」

「ふぉーていーん？」

剣崎と虎太郎は聞き覚えのない名前に首をかしげると、始はそれについて説明した。

「知っているだろう？バトルファイトに勝利したアンデッドに与えられる万能の力だ。これに封印されたフォーティーンというモンスターは巨大な体を持ち、この世界全てを滅ぼす力を秘めている。」
「これが…万能の力…」

剣崎はレリーフを見つめながら呟き、同時に旧BOARD理事長・天王寺博士がやろうとしていたことを理解した。

彼はケルベロスアンデッドとなり、バトルファイトに勝利した後、フォーティーンの手に入れて人類を滅ぼし、それから種族繁栄の力で新人類を作り出そうとしていたのだ。
始は説明を続ける。

「俺を倒したヒューマンアンデッドはその力を手に入れることを拒み、種族の繁栄だけを望んだ。だからフォーティーンはこのレリーフに封印されたままだったんだ。」

始が説明を終えると、次に橘が口を開き、喋り始める。

「少しばかり前、ラウズカードに封印されたアンデッドの研究中に不思議な現象が起きた…四枚のキングが新たなカードを生み出したんだ…何も描かれていないバニティカードをな。」

だが、三体目のジョーカーによるアンデッド再解放と同時に、バニティカードも消えてしまった。おそらくあのカードがキーになるのではと我々は考えている。」

虎太郎はそれを聞くと、橘に歩み寄って彼に話し掛けた。

「じゃあ、もう一度四枚のキングを集めれば…」

「そういうことだ。」

橘は虎太郎にそう言うと、志村の方に視線を移す。

「今の所、二枚のキングは志村が持っている。」

志村はポケットからスピードK「エボリューションコーカサス」、クラブK「エボリューションランチュラ」のカードを取り出すと、それを剣崎と虎太郎に見せて口を開いた。

「後の二枚はアンデッドとして解放されたままですがね。」

それを聞いた剣崎は拳を握り締めると、橘に歩み寄って言った。

「橘さん、皆で協力しましょう。俺も力を貸します。」

剣崎は真剣な顔付きで言ったが、三輪が剣崎と橘の間に入り、嫌味な口調で言った。

「笑えるわよねえ…変身も出来ないのに。」

「例え変身できたってお断りだぜ。」

次に禍木が剣崎、始、睦月にガンを飛ばしながら彼を馬鹿にするように喋る。

「後からしゃしゃり出てきて先輩面されちゃたまんねーからな。それに、テメーと相川始、アンデッドなんか信用出来るかよ。」

「よさないか。」

橘は禍木と三輪を止めようとしたが、志村が相棒の二人を庇う様子を言った。

「でもチーフ、見ての通り先輩達と一緒にじゃチームワークが乱れる可能性があります。」

「…勝手にしろよ。」

数々の暴言も積み重なり、流石に志村達に腹を立てた剣崎は三人を睨みながら口を開いた。

「アンデッドと戦っていくのに何もお前らと手を組む必要はない。

俺達は俺達で戦って行ける。行くぞ、始、睦月、虎太郎。」

そしてそう三人に言い放った後、剣崎は始達と共に、BOARD本

部を後にした。

翌日、剣崎は始、睦月と共に虎太郎の家を訪れた。

アンデッドサーチャーを虎太郎のパソコンにも取り入れ、索敵範囲を広くする為である。

広瀬がBOARDから持ってきたアンデッドサーチャーは旧型である為、新生BOARD本部が使っている新型アンデッドサーチャーと比べれば索敵範囲が大きく劣る。

これでは新世代に先にスピードのAを封印されてしまう可能性があるのだ。

彼らがAを手にした場合、ほぼ確実に剣崎達には簡単に渡さず、こちらに不利な交換条件をつけてくるであろう。

それを避ける為にも、索敵範囲を少しでも広くし、Aを見つけて封印するしかないのだ。

そして用を終えたらすぐに帰る予定だったのだが…

…
「すっげー…」

虎太郎の高級マンションの浴室に興味本位に入った睦月は、その純金で作られたバスルームに圧倒された。

剣崎たちはついでに虎太郎の家の中を見物し始めたのだ。

睦月は風呂桶の淵に手を触れると、虎太郎を羨ましく思い、カラーはともかく自分も出できればこんな良い家に住んでみたいと考えた。

睦月には山中望美という彼女がおり、同じ大学に通っている。

最近は就職活動などでまともにデートも出来ないが、彼女とは将来結婚し、家庭を築くつもりだ。

彼女とこんな家に住み、こんな浴室で共に背中を流し合えたらどんなに幸せだろうと考えると、自然に顔が緩んでしまう。

だがそんな最中、この家は虎太郎が自分達が活躍した本で儲けたお金で買ったのに、ライダーである自分は平凡な就職活動を続けたと考えると、次第に腹が立ってきた。

確かにライダーの思い出はこれからの社会生活には無用の物だが、やはり腹が立つ。

睦月はちよつとした悪戯を思いつくと、洗面台にあった純金のブラシを手に取り、それを上着の内ポケットにしまって剣崎達が待っているリビングに向かった。

…

リビングには剣崎、始、虎太郎の三人がおり、剣崎と始は広いリビングを見回っていた。

そこには純金のオブジェや外国産の高級家具などが並べられてあり、見るものを圧倒する。

リビングに戻ってきた睦月はブラシを落とさないように気をつけながら歩くと、再び言った。

「すっげー家…」

「でも、俺達の活躍した本で儲けたお金で買ったんだから、なんか複雑だよなあ…俺は俺で、皆は皆で大変なのに、虎太郎はコレだなんて…」

剣崎は少し嫌味な口調で言うと、始は苦笑を漏らした。

虎太郎は「何か良いよね〜！昔みたいで！」と喜んでいたが、その瞬間、虎太郎の家に設置したアンデッドサーチャーが反応し、虎太郎は急いでパソコンに駆け寄ってアンデッドサーチャーを開いた。ディスプレイにはアンデッドが出現した場所と、アンデッドのカテゴリが表示されていた。

「アンデッド出現！Aだ！ここから近い！」

虎太郎が大きな声で言い、剣崎達が一步身を乗り出すと、睦月の上着から「ボトツ」と音を立ててブラシが落ちた。
虎太郎は呆気にとられながらそれを見ると、睦月は「アンデッド、アンデッドアンデッド……」と言いながらリビングを出て行った。
剣崎、始は溜息をつき、睦月の後を追うと、後には呆然としている虎太郎だけが残された。

…
ビートルアンデッドはライダー達に苦しめられた鬱憤を晴らすように、虎太郎の家付近のキャンプ場を襲っていた。
周りには滅茶苦茶に壊されたテントや器具、そしてキャンパー達の遺体が転がっていた。

剣崎達はキャンプ場に着くと、真っ先にビートルアンデッドを睨んだ。

「カテゴリーA！」

剣崎が叫ぶと、睦月と始はそれぞれレンゲル、カリスに変身し、ビートルアンデッドに挑んだ。

戦闘開始早々二人のライダーは協力してAを圧倒していたが、程なくしてバイクに乗った志村達が駆けつけ、マシンを停めて降りると、禍木を先頭にビートルアンデッドに向かって走った。

「あいつら……！」

剣崎は志村達を睨みつけた。

このままではまた仲間割れで混戦となってしまう。
だがレンゲルは三人が傍に来た瞬間、彼らが変身する前に先頭にいた禍木を突き飛ばした。

「っの野郎！」

禍木は尻餅を着き、レンゲルにガンを飛ばしたが、レンゲルは「来るな！見てろ！」と彼らを一喝した。

そしてレンゲルがビートルアンデッドのほうを見ると、敵はカリスに羽交い絞めにされ、動きを封じられていた。

「睦月！やれ！」

カリスが叫ぶと、レンゲルは今が剣崎に三年前の恩返しをするときだと考え、レンゲルラウザーを取り出し、ラウズバンクから「ポラーブリザード」「バイトコブラ」のカードを引きぬいてラウズした。

ラウザーから電子音声の流れ、レンゲルが宙に跳ぶと、体を捻って敵をはさむようなキックポーズをとる。

カリスがその瞬間にビートルアンデッドから離れると、レンゲルの足から絶対零度の吹雪が発射され、ビートルアンデッドを凍らせて動きを封じる。

そして動けなくなったビートルアンデッドにレンゲルは強烈なキックを炸裂させた。

レンゲルの必殺技「ブリザードクラッシュ」である。

ブリザードクラッシュを受けたビートルアンデッドは力を失い、芝生の上に倒れて爆炎に包まれ、アンデッドバックルを開くと、レンゲルは剣崎から預かっていた「プロパーバンク」のAを投げ、ビートルアンデッドを封印し、戻ってきたカードをキヤッチした。

「剣崎さん、貴方のカードだ。」

そしてレンゲルは剣崎に向けてカードを投げ、剣崎はカードをキヤ

ツチしてその絵柄を見る。

青いヘラクレスオオカブトが赤いスピードのマークを背負った絵が描かれたそれは、まさに自分が使っていた「チェンジビートル」のカードだ。

剣崎は、まさに自分の半身とでもいうべきカードが戻ってきたことに純粋な嬉しさを感じていた。

これで…また皆と共に戦える…そう思うだけで、四年前のあの苦しきも充実していた日々を思い出した。

戦いを終えたレンゲルとカリスも、剣崎のAが戻ってきたことに安心し、二人で隣同士並んでほっとした。

だが、喜んでばかり入られなかった。

突如、禍木が変身したランスの槍がレンゲルの、三輪が変身したラルクの刃がカリスの背を切り裂いたのである。

「何考えてんだお前ら!？」

剣崎は目を大きく開き、ランスとラルクに問い掛ける。

「俺たちの邪魔すんなったろうが!!」

「そうそう、大人しく引退してればいいのよ!」

暴走したランスとラルクはカリスとレンゲルを攻撃し続け、剣崎の「止める」と言う問いかけにも耳を貸さない。

剣崎はカードを見つめ、眉間にしわを寄せて悩んだ。

本当はこんな形でライダーに戻りたくは無い。だがこのままでは新世代ライダーは暴走するばかりだ。

決意を決めた剣崎は、渋々ブレイバックルを取り出し、Aのカードを装填すると、それを腰に装着し、両手を腰の辺りに移動させ、右手を手の甲を前にして突き出す。

そして手首を180度させ「変身!」と叫ぶと、右手をバックルの

方に回して左手を突き出し、バツクルの方に伸ばした右手でブレイバツクルのレバーを操作した。

ベルトからは「Turn up!」と電子音声が響き、剣崎の前にヘラクレスオオカブトが描かれた青いエネルギースクリーンが現われる、剣崎は雄叫びを挙げて走り、スクリーンを潜り抜けると、ブレイドアーマーを身につけ、仮面ライダーブレイドへと変身した。人々を…そして、壊れそうな未来を守る為の勇気の剣が、今、復活した…

輝く勇気を心に閉じ込めた剣は暴走する刃を止める為、戦場に舞い戻る…

第5話（後書き）

止めて！剣崎と始の感覚があればアンデッドサーチャー要らないじやんって突っ込み止めて！

遅れて申し訳ありません…朝倉成分抜いて文をちょっと書き直すだけなりに五日以上もかけるとか…
怠け者で申し訳ございません。

第6話

今、紫紺の戦士・仮面ライダーブレイドが復活した…

その蒼く彩られた体は一陣の風を連想させ、見る者に疾走感を与え、身に纏った銀色の鎧は西洋の騎士を連想させた。

そして、輝く勇気を閉じ込めた真紅の瞳からは、悪を許さぬ正義の心が燃え盛る炎のように滾っていた。

壊れそうな未来を守るため、研ぎ澄まされた勇気の剣は、三年という沈黙を破り、再びその刀身を抜き放った。

蒼き戦士は暴走する二本の刃を止めるため、再び戦場を駆け…

「止める！どういってもりだ！」

ブレイドはランスとラルクの攻撃を回避しながら接近し、彼らを交互に殴って自分、カリス、レンゲルから距離を離させた。

その動きは風のように素早く、軽やかで、剣崎は完璧にライダーの力を近いこなししていた。

しかし、元来ブレイドよりアンデッド体のジョーカーの方がスペックは高い。

それでも剣崎がブレイドの力を求めたのは、愛着や望みの他に、ジョーカーよりブレイドの方が使いやすいからという理由もある。

確かにジョーカーの戦闘能力は通常フォームのブレイドを遥かに超えているが、ジョーカーになっている間はアンデッドの闘争本能と戦わなければならない。

凶暴なジョーカーの破壊衝動は並の人間の自我なら簡単に飲み込まれ、殺戮しか考えられない怪物になってしまうほど強い。

剣崎は意志の強い人間の為、その衝動に耐えることができるが、やはりアンデッドの破壊衝動など感じていて気持ちのいいものではない。

やはり剣崎には、自分が慣れ親しみ、何の問題も無く使いこなせるブレイドの方が合っているのだ。

剣崎も自分の元にブレイドが戻り、これでまた皆と共にアンデッドを倒し、ジョーカーにならずに戦っていけることにほっとしていたが、新世代ライダー達とは戦いたくなかった。

それはカリス・始、レンゲル・睦月も同じである。今は仲間同士で争っている場合じゃないのだ。

だがランスとラルクは体勢を立て直し、再び自分達に襲い掛かるうとしていた。

そんな時、一人ラルクとランスの暴走を傍観していた志村が「禍木！夏美！」と叫んで二人を制止した。

ブレイド達は一瞬安心したが、それは戦いを止めるためではなかった。

志村は腰にグレイブバックルを装着し、一步一步ゆっくりとブレイドに近づいてきた。

「見せてもらいますよ剣崎さん、貴方の腕を…変身！」

志村はブレイドの1メートル手前で止まると、グレイブバックルをオープンアップさせてグレイブに変身した。

グレイブは更にブレイドに近づき、目の前で立ち止ると、華麗な動きで拳を突き出し、ブレイドを攻撃した。

ブレイドは何とかグレイブのパンチを防御したが、グレイブがすかさず繰り出した肘内を受けてしまい、数歩後退りした。

そのままグレイブはグレイブライザーを取り出し、ブレイドに切りかかると、ブレイドは腰のホルスターから自分の武器である醒剣ブレイラウザーを引き抜き、グレイブの剣を防ぐ。

二人は罅迫り合いの状態のままカリスやランスの傍を離れていき、誰も加勢が出来ない位置まで移動すると、火花を散らし、お互いの剣と剣をぶつかり合わせる剣戟戦を展開した。

スペックはグレイブの方が勝っていたが、ブレイドは競り負けずに剣を振るい、グレイブと互角の戦いを繰り返した。何度か刃を叩き合わせた後、二人は再び鏝迫り合いの状態に入り、お互いの視線を合わせた。

「流石ですねブレイド！」

グレイブはスペックで勝る自分と互角に戦うブレイドの腕前を称え、賞賛を送った。

だがその瞬間、二人のライダーの足元に特異な形の手榴弾が着弾し、ブレイドとグレイブは吹き飛ばされて芝生の上を転がった。

二人はすぐに立ち上がり、手榴弾が飛んできた方向を見ると、カリス、レンゲル、ラルク、ランスを突き飛ばし、こちらに接近する一体のアンデッドの姿を発見した。

「カテゴリーKか!？」

ブレイドはその姿を見て叫んだ。

アンデッドはダイヤのカテゴリーK・ギラファアンデッドだったのだ。

ギラファアンデッドは凶暴な雄叫びを上げ、自らの武器である「ヘルター」「スケルター」の二刀の剣を振るい、ブレイドとグレイブを攻撃した。

だが二人はその刃を軽やかに回避し、自分達の武器を用いた斬撃をギラファアンデッドに連続で見舞った。

以前、頑丈なオリハルコンエレメントのスクリーンを破壊し、ギヤレンを変身不能にまで追い込んだカテゴリーKとさえど、四年前の戦いを生き抜いたブレイド、そして新世代の中で一の実力を持つグレイブのコンビ相手では分が悪いのだ。

ギラファアンデッドは不利を悟ると、二人の前から逃亡していった。

グレイブとブレイドは古代の力のキーとなるカテゴリーKを逃がすわけには行かないと考え、二人同時にギラフアアンデッドを追った。

：

ブレイドとグレイブは共にキャンプ場を出、グレイブを先頭にギラフアアンデッドを追っていた。

だがキャンプ場のすぐ近くにある坂道の傍を走っている途中、何者かがブレイドに体当たりして掴みかかり、ブレイドと共に坂を転げ落ちていった。

転げ落ちたブレイドが敵から離れ、立ち上がってみると、そこにはスピードのカテゴリー2「リザードアアンデッド」の姿があった。

リザードアアンデッドがブレイドの邪魔をしたのだ。

リザードアアンデッドは右手に装備された剣でブレイドを攻撃したが、ブレイドはその剣をブレイラウザーで防御して押し付け、素早い剣戟を何度もリザードアアンデッドの体に叩き込んだ。

そしてリザードアアンデッドを刃の切っ先で突き飛ばすと、ラウザーのカードホルダーをオープンし、自分が数日前倒したアアンデッドを封印したプライムベスタである「キックローカスト」と「サンダーデИАー」、*「マツハジャガー」*の三枚を取り出した。

ブレイドはすかさず三枚をラウスすると、*「Kick…Thunder…Mach…Lightning…sonic！」*と電子音声の流れ、三枚のカードが宙に舞い、ブレイドはそのカード達を背に右手に持ったブレイラウザーを逆手にして持ち、腰を低くした後、上半身をゆっくりと上げてブレイラウザーを地面に突き刺した。その瞬間三枚のカードがブレイドの体に吸い込まれ、ブレイドのスピードを象った銀色の仮面が一瞬赤く輝く。

そして胸元に右手を斜めに突き出し、空中にジャンプしてキックポーズを取ると、突き出した右足が雷を纏い、超高速でリザードアアンデッドに蹴りこんだ。

「ウエーーーーーイ!!!」

ブレイドのキックはリザードアンデッドに直撃し、敵は地面に倒れて爆炎に包まれた。

ブレイドの必殺キック「ライトニングソニック」である。

ブレイドはラウザーからカテゴリ2のプロパーブランクを取り出し、リザードアンデッドに投げると、カードはアンデッドを封印し「スラッシュリザード」のカードとなってブレイドの手元に戻った。戦いを終えたブレイドは一息付くと、カードを仕舞う。

空は不気味な黒い暗雲に覆われ、ブレイドは暗黒に染まっていく空を見上げた…

…

一方、ギラファアンデッドはグレイブにより、地下道に追い詰められていた。

ギラファアンデッドは敗北を悟ると、人語でグレイブに話し掛けた。

「貴様…貴様は…?」

ギラファアンデッドは、らしくもなく恐怖を肌で感じていた。

しかし、目の前にいるグレイブが恐ろしいのではない。

本当に恐ろしいのは、変身者である志村のほうであった。

ギラファアンデッドは感じていたのである…

志村の中に渦巻く、この世界のすべてを手に入れんとする強欲な野心を…自分が今まで戦ったこともない強大な力を…そして計り知れない邪悪な意思を…

グレイブは、その本性を仮面で隠すように無言でコモンブランクのカードを投げると、ギラファアンデッドを封印し、戻ってきたカードをキャッチして腰のラウズバンクに仕舞った。

そして乾いた足音を立て、グレイブはその場から立ち去っていった。

…
戦いを終えた剣崎や志村達はBOARDの本部に向かい、橋と共に司令室に居た。

司令室のテーブルには、「エボリユーシヨンコーカサス」「エボリユーシヨンギラファ」「エボリユーシヨンタランチュラ」のスピード、ダイヤ、クラブのKのプライムベスタが置かれていた。

「これで残ったキングは一枚…見ただろう。剣崎、始、睦月のライダーとしての力は決して君達に劣っているわけではない。六人で力をあわせれば、仕事も速く片付く。」

橋が志村達三人にそう言い聞かせると、禍木と三輪は面白くなさそうな顔をして去っていき、志村は剣崎達旧世代ライダー達をじっと見つめていた。

…
橋の話が終わった後、剣崎は志村に呼び出され、本部の庭園に来ていた。

「すみません剣崎さん…」

志村は唇をかみ締めると、剣崎に頭を下げ、今までの無礼を謝罪した。

「僕達は今まで調子に乗りすぎていたかもしれない…あの時剣崎さんが居てくれなかったら、僕はどうなっていたか分からない…」

「…分かってくれたのか？」

剣崎は穏やかな口調で言うと、志村は頷いて話を続けた。

「劍崎さん、僕も貴方達に協力します。いえ…協力させてください！」

志村は劍崎に右手を差し出し握手を求めた。

劍崎はそれを見て思わず笑顔になった。

まだ一人だけとはいえ、ようやく新世代のライダーと和解できたのだ。

劍崎にとってこれほど嬉しいことは無い。

劍崎は左手を差し出して志村と握手すると、共に戦うことを誓い合った。

…

一方、禍木と三輪は本部の外壁に寄りかかり、面白くなさそうな顔をしていた。

これからは新世代である自分達の天下だと思っていたのに、旧世代が全員復活し、自分達の存在意義が薄れてしまったような気がしたのだ。

今までせっかく自分達で戦ってきたのに、旧世代が復活したら手を組めなど、まるで自分たちは最初から劍崎達の代わりだったと認めるような行為だ。

志村は素直に協力する姿勢を見せるようだが、自分達にとってそんなことは、プライドが許さない。

「なんか気に食わねえよなあ…今更ブレイドだのカリスだのレンゲルだの…」

禍木は忌々しげに呟くと、三輪は少しうつむき、静かに口を開いた。

「あんな奴らには負けたくない…もっともっと…強くなりたい…もっと…もっと…誰よりも…」

そう呟く三輪の瞳には、強さへの渴望と野心が、どす黒い炎のように静かに燃え始めていた…

…
空がオレンジ色に染まり、夕日が沈み始めた頃、剣崎は烏丸が入院している病院を訪れていた。

「所長！」

「剣崎！」

烏丸は剣崎が病室に入ると、ベッドに寝ながら読んでいた本を枕元におき、上半身を起こした。

「所長、大丈夫ですか？」

「ああ、予め橋には聞いていたが、まさか本当に帰ってきていたとはな。久しぶりだな、剣崎。」

「はい！」

剣崎は烏丸に頭を下げると、自分がジョーカーになってから送ってきた日々、日本に再来して仲間達と再会し、新世代ライダー達と出会い、ブレイドの力を取り戻したことを話した。

「そうか…ライダーの力を取り戻したか…」

「はい。」

「すまないな、私の力不足のせいで、またバトルファイトを引き起こしてしまった…私はいつも何も止められず、情けないよ。」

烏丸はラウズカードが発見され、BOARDでアンデッドを解放するべきだという意見が強まっていくことを阻止しようとしたものの、

その最中、広瀬義人の暴走による独断でアンデッドは解放されてしまった。

今回もまた三体目のジョーカーにプライムベスタの大半を奪われ、アンデッドを解放されてしまった。

人類を守るべき立場にいるはずであるのに、その勤めを果たせないことが烏丸は辛かった。

剣崎は、そんな烏丸に優しく微笑み、口を開く。

「所長、安心してください。アンデッドは必ず封印します。それに俺は、また皆と会うことができました。不謹慎かもしれないけど、不幸中の幸いです。」

「ありがとう剣崎…しかし、なぜ三体目のジョーカーはアンデッドを解放したのがまだ分からない…そのままキングのカードを使えば、相川君の言っていたフォーティーンが手に入ったものを…」

烏丸は疑問を口にする、剣崎も目を細めて考えた、

烏丸の言うとおりである。こんな手間をしなくてもフォーティーン力は簡単に手に入ったはずだ。

それが何故こんな回りくどい方法を取ったのか？何か理由があるのだろうか？

謎がまた一つ増えた…

…
「まったく、何で俺たちがあんな奴らと手を組まなくちゃならねんだよ。」

月が昇り、夜が訪れた頃、禍木は本部の近くにある断崖の上で海を眺めながら愚痴を呟いていた。

やはり旧世代のライダー達と手を組むのは面白くない。

これからどうやって旧世代を出し抜くかを考えていると、禍木の背

後から一つの異形の影が迫った。

影の主は右腕を上げ、装備された刃で禍木を切り裂こうとしたが、禍木は間一髪それに気づき、横に受身を取って攻撃を回避した。

そしてすぐに立ち上がり、自分を攻撃した影を睨むと、そこにはパラドキサマンティスの姿を象り、黒と金に体を彩られたアンデッドの姿があった。

ハートのカテゴリーク「パラドキサアンデッド」である。

「カテゴリークか!？」

禍木はランスバツクルに緑のチェンジケルベロスを設定し、腰にバツクルを装着してオープンアップさせ、ランスに変身すると、雄叫びを上げながらランスラウザーを構え、パラドキサアンデッドに立ち向かった。

「最後のキング！俺が封印してやる!!」

ランスはいきり立って槍を振るい、パラドキサアンデッドを攻撃した。

四体の内、三体は志村が封印している為、ランス・禍木はリーダーに負けじと焦っているのだ。

ランスラウザーの刃は四回パラドキサアンデッドを斬ったが、敵はキングであるために手ごわく、刃の付け根を掴まれて動きを封じられてしまう。

そしてパラドキサアンデッドは腕に装備されたカッターで何度もランスの体を切りつけた。

ランスは負けじと「マイティインパクト」のカードを取り出し、ラウズすると、「インパクトスタンプ」を発動して掴まれた槍を押し込み、無理やりアンデッドを突き飛ばした。

パラドキサアンデッドが五メートルほど吹っ飛び、地面に激突する

と、ランスはコモンブランクのカードを取り出し、アンデッドに向けて投げ、封印した。
そして戻ってきたカードをキャッチすると、ランスラウザーを肩に担ぎ、息を荒くしながらそれを誇らしげに見た。

「やった…やったぜ！」

ハートのカテゴリーK「エボリユーシオンパレードキサ」を手に入れたランスは心の底から喜んで叫んだ。

ようやくリーダーの志村に一步近づけたと思えたからである。

だが喜びも束の間、周囲に不気味な白い霧が発生し、辺りを白く包み込んだ。

ランスは何事かと思い、慌てて周囲を見回すと、新たな異形の影を発見した。

その影は自分が見たものとは左右逆の形をしていたものの、カミキリムシのような触覚とフェイスガードに隠れた凶暴な顔だけは忘れなかった。

それは間違いなく、「ジョーカー」の姿だったのだ。

「貴様は…ジョーカー！」

ランスはランスラウザーを数回振り回した後、その先端をジョーカーへと向けた。

ジョーカーはゆっくりと霧の中から出、その「白い」姿をさらすと、それに呼応するように落雷が空に光り、大雨が降り始めた。

それから僅かな時間がたった後、鈍い気色の悪い音とランスの絶叫が夜の闇に響いた…

…

白いジョーカーから何とか逃げ出した禍木は、本部のエントランス

に着くとどさりと床の上に倒れた。

既に虫の息の禍木は荒い呼吸を何度も繰り返すと、聞きなれた足音を耳にした。

三輪である。

三輪は階段のから禍木の傍まで歩いてくると、しゃがんで彼を見下ろした。

それに気付いた禍木は決死の思いで口を動かし、言葉を発した。

「ジョーカーが…現われた…これ…これを…」

禍木ははいていたジーンズのポケットからエポリューションパラドキサのカードを取り出すと、三輪はそれを受け取った。

「逃げる…奴の狙いは…これだ…」

その言葉を最後に、禍木は瞳を閉じた…

三輪はそんな禍木を気にもとめず、受け取ったキングのカードを不気味な笑顔で見つめていた…

…

烏丸への挨拶を終えた剣崎は、ブレイド専用マシン「ブルースペイダー」にのり、大雨の振る都内の車道を走り、今日眠る場所を探していた。

そんな時、背後からクラクションの音が鳴り、剣崎はふとマシンを止めて後ろを見た。

するとこちらに一台の黒い大型のバイクが近づき、剣崎のマシンの隣りに止まると、乗っていた人物はヘルメットを取った。

メットの下からは朧の顔が現われ、慌てた表情で剣崎を見た。

「広瀬さん、どうした？」

剣崎が聞くと、栞は息を少し荒くして口を開いた。

「探したわ剣崎君…落ち着いて聞いて…禍木君が…禍木君が…」

栞のその先の言葉を聞いた剣崎は、眼を大きく開き、栞と共にマシンを走らせ、本部へと向かった。

…

剣崎は栞と共に本部のエントランスに着くと、倒れ、冷たくなった禍木を呆然としながら見下ろしている始、睦月、橘、虎太郎、三輪の五人と、禍木の名を必死に呼びながら彼の体を揺する志村の姿を見つけた。

「禍木！禍木！」

志村は必死に禍木を起こそうとしたが、既に脈は無く、禍木は屍と化していた。

「そんな…」と剣崎は呟いた。

嫌な男だったが、例え敵対的な人間であったとしても、人が死んで喜ぶほど剣崎も仲間達も薄情ではない。

むしろ、同じライダーが命を落としたことに悲しみを感じ、嘆いていた。

「嫌あああああああ！」

三輪は恐怖と悲しみの叫びをあげ、しゃがんで禍木の亡骸に触れ、絶望している志村に抱きついた。

「一体誰が…誰がこんなことを!？」

志村は大きな声を出してそう叫び、禍木の死を悲しんだ。

そして気が動転していた為か、志村は三輪が不気味な笑みと共に自分の上着のポケットから三枚のキングを盗んだことに気付けなかった…

一方剣崎は、禍木の亡骸の右手が何かを握っていたことに気付いた。剣崎は禍木の手からそれを抜き取ると、それはプライムベスタであり、クラブ「フュージョンエレファント」のカードだった。

これが何を意味するのか？

この時の剣崎にはまだ分からなかった…

…
その後、志村からカードを盗んだ三輪は、赤いライトに照らされた本部の庭園を走り、そこから逃げ出そうとしていた。

だが前方に白い霧が発生して彼女の逃げ道を塞ぎ、その中から一人の人影が現われ、ゆっくりと三輪に近づく。

三輪はその人物の顔を見た瞬間、驚愕で目を疑った。

やがてその人物は白い異形の姿へと変身すると、三輪の首をその手で掴み、彼女の服のポケットから四枚のカテゴリーKのカードを奪った。

そして彼女が大きな悲鳴をあげた後、手に掴んだ彼女の首の骨を折って止めを刺した…

…
数刻後、本部の庭園まで駆けつけていた一同は、三輪の死体を発見した。

「夏美までが…そんな…そんな!!」

禍木、三輪…二人の間を失った志村は完全に打ちのめされ、地面に膝をついた。

剣崎はさつきと同じように、三輪が何かを握っていることに気付くと、彼女の手握られていたものを抜き取った。

それはスペード4「タツクルボア」のカードであった。

先ほど、志村が「キングのカードが消えている」と言い、姿の見えない彼女を探したが、遅かった…

可能性は二つ考えられた。

カードを奪った誰かを追いかけて三輪は殺されたか…あるいはカードを盗んだ夏美を誰かが殺したか…

いずれにしろ、その誰かがジョーカーである可能性は強い。

「（何処に居るんだジョーカーは…それに…殺された二人は何故このカードを…）」

剣崎は唇を噛み、二人が握っていたカードを見つめながらそう思った。

三体目のジョーカーは何処に居るのか…この二枚のカードは何を意味しているのか…

真実はまだ闇の中である。

第6話（後書き）

遅れて申し訳ございません。

ようやく後半にさし迫ってきました。

よければハルヒとのクロスの方の方がよかったか、今作の方がよかったですか教えていただけると幸いです。

第7話

三輪と禍木の死の数日後：橋は精神的に大きな傷を負った志村に休息を与え、剣崎達にもまた心を落ち着ける為に休息を取るよう言い渡した。

最初は皆まだジョーカーの正体もわからず、キングのカードも奪われてしまったのに休んでいられないと言ったのだが、この所の戦い続きで疲労が蓄積されているのは確かであり、休まなければ全力で戦えないという橋の説得で渋々つかの間の平穏を享受することにした。

そして剣崎は天音と始に付き添い、都内の遊園地に来ていた。

二人のライダーの死で遊ぶ気にはなれなかったが、天音とデートの約束をしていた始は断れず、予定がなかった剣崎も強引に彼女に誘われ、付き添う羽目となったのである。

「こんなところに来るのも久しぶりだな…」

剣崎はアトラクションで遊んでいる始と天音をベンチに座って待ちながら、笑顔を絶やさない人々の様子に見入っていた。

ジョーカーになり、戦地で人々を救っていた時は、苦しみや悲しみに苛まれる人達の姿を沢山見てきた。

同じ地球に生きる人々であるのに、どうしてもここまで差があるのだろうか？

遊園地で遊ぶ人々を見てみるとそんな疑問を抱かずにはいられない。幸せになりたいという思いは同じはずなのに、その思いが報われない人々が多い。

そして思いが報われなかった人々が助けを求めても、目を背けられたり、見向きもされないことすらある。

剣崎は、そんな人々を一人でも多く助けたい…そう思っていた。

せめて伸ばされる手があるのならば、自分が掴み、助けたい。例え、鋭く禍々しい怪物の手であったとしても、何度異形の掌を恐れられても、苦しむ人達を助けたい。

それが剣崎の願いであった。

ふと気づくと、ジェットコースターから降りた始と天音が自分に向けて歩いてくるのが見えた。

剣崎は二人に手を振ると、二人は笑顔で剣崎に歩み寄った。

「剣崎さん！ただいま！」

「待たせて悪かったな、剣崎。」

「大丈夫大丈夫！久しぶりに楽しそうな人達の姿を見てたら、なんかほっとしたからさ。」

剣崎はいつものように明るく微笑むと、二人と共に遊園地のゲームコーナーへと向かった。

：

その頃睦月は、久々にデートの時間が取れたガールフレンド・望と共に見晴らしのいい公園でピクニックを楽しんでいた。

睦月は、彼女が作ってきたおにぎりにかぶりつくと、満面の笑みで声を漏らす。

「うん、美味しい！」

睦月にとって、久しぶりの愛情のこもった味であった。

この所、望も本当に就職活動が忙しく、話す時間も会う時間もなかった。

今日が偶然彼女の都合がつく日であったことは、睦月にとって不幸中の幸いである。

睦月はまるで夢中になった子供の様に、おにぎりをむしゃむしゃと

食べていった。

「もう睦月だったら…子供じゃないんだからもっと落ち着いて食べなさいよ！」

望はあきれながらも、睦月の元気そうな姿に安堵していた。

望も久しぶりに睦月に会い、嬉しいのである。

再びアンデッドが解放され、睦月がまた仮面ライダーの仕事をはじめたと前に電話で知らされた時は、望も心配したものであった。

睦月はスパイダーアンデッドの邪悪な意志に取り込まれた際、歪んだ性格と化して家族や望の下から離れ、他のライダー達と敵対した。他にもジョーカーに破れ、重傷を負ったことすらある。

その時の寂しさと不安を、望は忘れたことはない。

だから今度の戦いでまた睦月が危険な目にあわないかと、彼女はとても心配しているのである。

「ん？どうしたんだよ望？」

望の視線を感じたのか、睦月は食べるのを中断し、目を丸くして問いかけた。

そして望は心配そうな目で、少し俯きながら口を開いた。

「また戦いが始まったんでしょ？睦月が危険な目にあったり、前みたいに突然いなくなったりしたらどうしようって考えると、心配で

…」

「…ありがとう、でもさ、そんなに心配するなよ。」

睦月は四年前から少し凜々しくなった笑顔を望に見せ、安心するよう促した。

「俺だっつていつまでも子供じゃないし、剣崎さん達だっつて付いてる。望にはもう心配かけないっつて約束するから、安心してくれよ。」

「睦月…うん、分かった。」

望はほんの少し成長した睦月の姿に頼もしさを感じると、頷いて了承した。

しかし睦月は、頼もしい笑顔を見せたのも束の間、思い出したように表情を呆けた物に変えた。（勿論、望が少しがっかりしたことは言うまでもない）

「そっだ！なあ望、4とJって、何か意味があるものなのかな？」

「は？」

望は意味不明な質問に首を傾げ、睦月はその説明を始める。

「実は、俺達の他に新しいライダーが三人いたんだけど、その内の二人が殺されちゃって…その時に二人が持っていたのが、カテゴリー4とJのカードなんだ。」

「4とJ…うん、駄目。数字とアルファベットだけじゃ見当も付かないよ。」

「そっだよな…」

睦月は落胆してため息をついた。

禍木と三輪が無意味にメッセージを残すとは考えられないが、その意味はまだ分からない。

4とJの二つの文字に一体何の繋がりがあるのか？

睦月にも望にも分からなかった。

…

「うーん…広瀬さん、何か分かった？」

「全然：白井君は？」
「僕も考え付かないよ……」

その頃、虎太郎と栞の二人は、虎太郎の家の食卓に向かい合って座り、死んだ二人が残した4とJのカードの謎について考えていた。剣崎はこのカードを何かのダイイングメッセージと受け取り、虎太郎と栞はライダーをサポートする立場としてその謎を解こうと奮闘していたのだ。

だが、二人が残したメッセージの意味が中々分からない。

もしかしたらジョーカーの正体が秘められているかもしれないメッセージの為、投げやりに見えるわけには行かないのだ。

二人はテーブルに置かれた皿に乗った高級チョコレートを食べ、糖分を補給すると、気合を入れなおし、思考を続けた。

…

一方剣崎達は、遊園地のゲームコーナーを出、今まさに帰ろうとしている最中であつた。

しかし、十分遊んだというのに、天音の顔は優れない。

天音はクレーンゲームで取ろうとした猫のぬいぐるみを取る事が出来ず、むしゃくしゃしていたのだ。

「もう！後ちよつとだったのに！あれさえ取れば今日のデートは完璧だったのにな」

「だったら、俺が譲ってくれるよう店員に頼んでもよかったのに。」

始はむくれる娘に手を焼く父親のように天音に言つと、天音は反論した。

「駄目！それじゃ負けたみたいじゃない！そんな取り方はルール違反よ！正々堂々、ルールは守らなきゃ！」

という割りに不満そうな顔をして早歩きし、距離を離していく天音の姿に、剣崎と始は苦笑した。

こういうところはまだ子供っぽいままだ。

始は剣崎に視線を合わせると、謝罪の言葉を述べた。

「すまなかつたな剣崎、俺と天音ちゃんに付き合わせて。」

「いいよ。久しぶりに楽しそうな人達の姿が見れて、安心してる。」

剣崎は満足げな笑顔で始に答えた。

しかし、始は少しくらい顔をし、俯く。

剣崎はその様子が気になり、目を丸くして口を開いた。

「どうしたんだ、始？」

「…あとのくらい、こうしてられるんだろうな。」

その言葉に剣崎も哀愁に表情を染める。

確認したところ、奪われたアンデッドの殆どは封印した。

もし三体目のジョーカーがハートのカテゴリーKを手に入れているとすれば、残る敵はあと一体…三体目のジョーカーだけである。

だが三体目のジョーカーを封印してしまえば、残るアンデッドは剣崎と始の二人のみ…また二人は離れ離れにならなければいけない。

剣崎は、かつて同じような状況に陥った始の気持ちを今実感していた。

親しい人達と離れたくはない…だが、離れなければ世界が滅びてしまう…

強いジレンマが、剣崎と始の心を締め付けていく。

だが剣崎は、そんな気持ちを押し殺しながら、始に笑いかけた。

「本当なら、二度と俺達は会っちゃいけないんだ。それがこんな形

で少しの間でも一緒にいられるんだから、贅沢はいえないだろ。」

「分かってている…分かってるさ…だが…」

「それに！俺達は離れてても友達だ。いつか皆がいなくなっても、俺達は同じ世界、同じ時間に生きてる…それだけでいいじゃないか。」

「…そうだな。」

始は剣崎にまだどこか寂しげな様子で答えると、剣崎は始を元氣付ける意味も含め、からかうような表情をしながら微笑した。

「お前が弱音を吐くなんて、らしくないぞ始！」

「…フン、ほっとけ。」

始も微笑で笑い返し、二人は四年前から変わらぬ絆の深さを再確認した。

きっと自分達は運命に勝てる…そんな強い確信を胸に抱きながら…しかし、そんな穏やかな時間は突然壊されることとなる。

剣崎と始の感覚が、またあのアルビローチ達の気配を察知したのである。

『っ！！？』

二人は外敵の気配を感じた獣のように反応を示すと、自分達の先を歩いていた天音の周囲に、突如アルローチ達が空から現れ、彼女を取り囲んだのである。

「きゃあああああああ！？」

鋭く上がった爪を蠢かせ、気色の悪い呻き声を上げて迫るアルビローチ達の姿に、天音は悲鳴を上げ、背筋を凍りつかせる。

同時に、遊園地に居た利用客や従業員といった人々も、怪物達の出現に恐怖して逃げまどい、人々が楽しく過ごす遊園地は阿鼻叫喚の地獄へと塗り替えられた。そんな人々や天音を助けるため、剣崎と始はアルビローチ達に掴みかかった。

『天音ちゃん！』

二人は、生身のままで非常に高い戦闘能力を駆使し、アルビローチに立ち向かっていった。

「ウェイ！ハッ！ヤアッ！」

剣崎は、ブレイドの姿の時にも使用する戦闘スタイルを駆使し、一撃一撃が強力な拳や蹴りでアルビローチを固いアスファルトの上へと叩き伏せていく。

「ハッ！又ン！」

始も、身構えて腰を低くし、カリスに変身した際に使う戦闘スタイルで、高い鋭さを誇るチョップや猛々しい動きから放つキックで次々にローチ達を倒した。

二人は囲まれていた天音を救出すると、始が天音の方を振り向き、必死の形相で叫んだ。

「天音ちゃん！逃げて！」

「でも始さんが！」

天音は剣崎がライダーだということは知っているため、剣崎は戦えることがわかる。

しかし、四年前から始が何か秘密を持っていることは分かっていたが、彼がカリス…ジョーカーであることは未だ知らないままである。始も彼女の前では戦士の姿を晒すことはしたくないし、剣崎もそのことはよく分かっている。

だが人間の姿のままでは大量のローチ達を相手にするには不利である。

ここが決断の時なのか…始がそう思いながら眉間に皺を寄せた、天音はその姿を見て掌を握り、目元を凜々しくつり上げると、唇を開いた。

「始さん…絶対…絶対私の所へ戻ってきてくれるよね!？」

彼女が発した言葉は四年前からの変わらぬ願い…

始が何を隠していようと、何があっても変わることがなかった、彼に帰ってきてほしいという願い…

それを聞いた始は葛藤した表情を振り払うと、強く頷き、その願いを聞き入れ、彼女の瞳を強く見つめた。

「…ああ！俺は必ず君の所へ帰る！だからその為に…俺に君を守らせてくれ！」

「絶対だよ！私、待つてるから！」

二人は堅く約束をかわすと、天音は始の言った通りに、ローチ達が蠢く戦場から逃げて行った。

他の人々も、誰一人怪我なく無事に避難し、遊園地からは人が居なくなっていた。

しかし、剣崎と始は疑問を抱く。

ローチ達は天音が逃げた方向にしか向かおうとはせず、他の人々には一切興味を抱かないのだ。

中東であれだけ無差別に人を襲っていたローチ達だ、ダークローチ

同様、人肉と殺戮に興味を抱かないはずがない。

だが、今の奴らは明らかに天音を優先して襲おうとしている。

これは一体どういうことなのだ？

だが、思考を巡らせる間にもローチ達の数は増えていく。

剣崎は天音が始の視界の外へ去ったことを確認すると、ブレイバツクルとAのカードを取り出し、始に向けて叫んだ。

「行くぞ、始！」

「ああ！」

始もAのカードを取り出し、腰にカリスラウザーを出現させた。

そして二人は並び立つと、剣崎はベルトにカードをセットして変身プロセスを行い、始もラウザーにカードをスラッシュし、ラウズさせる。

『変身！』

二人の叫びと共にベルトから電子音声が響き、剣崎は眼前に放出されたスクリーンを潜り、始は水のように揺らめく輝きを纏い、それぞれ仮面ライダーブレイド、仮面ライダーカリスへと変身を遂げた。ブレイドは醒剣ブレイドラウザーをホルスターから抜刀し、カリスは醒弓カリスアローを右手に出現させると、襲い来るローチ達へと切りかかった。

「ハアツ！ウエイ！」

「ヌン！デヤツ！」

ブレイドはパワー重視の豪快な大振りでブレイラウザーを振るい、荒々しいアクションでアルビローチを次々になぎ倒していく。

カリスもまたカリスラウザーに装備された刃を凄まじい速さで振る

い、敵の反応を許さぬ連続斬りでローチを片付けていった。

ブレイドとカリス、全ての生物達から存在すら許されぬダブルジョーカーであり、脅かされる人々と世界を救う勇者、ダブルライダーである二人の戦士…

緑の血が通う異質の体に暖かく灯る人間の心、全てを守る勇者の姿の裏に全てを滅ぼす異形の姿…

心は人間でありながら体は人間でない…正義の戦士でありながら忌み嫌われし怪物…

まるで光と闇のように表裏一体の存在である二人のライダーは、無尽蔵に湧き出す化物達を凄まじい強さで退けていった。

そして戦い続けて行く内に、仲間達も次々に戦場へと駆けつける。アンデッドサーチャーでアルビローチをキャッチし、愛する人との一時を中断した睦月は、仮面ライダーレンゲルの姿で戦場と化した遊園地に駆け付け、戦列に加わった。

「クソッ！よくも久しぶりのデートを台無ししてくれたな！ハッ！ヤアッ！」

レンゲルは安らぎの時間を奪われた怒りをぶつけるかのように醒杖レンゲルラウザーを振り回してアルビローチ達を殴打し、倒していく。

さらに橋ごと仮面ライダーギャレンも駆け付け、醒銃ギャレンラウザーの銃口をアルビローチ達へと向けた。

「…ハッ！」

そしてクールな声を発しながら引き金を引き、弾丸を連射して正確に狙った標的を撃ち倒していった。

やがて志村・仮面ライダーグレイブも傷心の身を奮い立たせて駆け付け、醒剣グレイブラウザーを振るいながらアルビローチを切り捨

てていった。

ラルクとランスが居なくなつた今、全員が集合した仮面ライダー達はそれぞれが得意とする戦闘スタイルで群がる敵を蹴散らしていく。しかしすさまじい混戦が続く中、ギャレンはいつの間にか戦場から姿を忽然と消していた…

…

「4とJ…4とJ…!？」

その頃、未だ虎太郎と共に二人が残したダイイングメッセージの意味を考えていた栞は、ふと一つの考えにたどり着き、うつむいていた顔をはっと上げた。

「もしかして…もしかして犯人は…」

「どうしたの？」

虎太郎も顔をあげ、あっけらかんとした目で彼女を見ると、栞は勢い良く椅子から立ち上がり、叫んだ。

「剣崎君たちが危ない!!」

栞は大急ぎで玄関に向かい、虎太郎も慌てて椅子から立ち上がると、彼女を追った。

…

マンションの外に出た栞は、虎太郎が契約駐車場に停めてある彼所有のフェラーリの助手席に乗った。

続いてやってきた虎太郎も車に乗り込もうとしたが、その寸前、牛乳配達バイクが停まっているのが目に入り、このマンションへの配達を終えた年配の女性の配達員がバイクに乗って走り出そうとし

ていることに気付くと、急いでバイクに近づき、財布を出した。

「おばちゃん！牛乳頂戴！」

虎太郎は一本のビン入り牛乳を買うつと、キャップを空け、くびつと飲み始めた。

そして久々の牛乳の味に舌鼓を打つと、牛乳髭を拭って満面の笑みを浮かべた。

「かあ〜！やつぱ飲むなら牛乳じゃなきゃ！」

「虎太郎！早く！」

菜はグズグズしている虎太郎を叱ると、虎太郎は一気に残った牛乳を飲み終え、ビンを返して自分の所有する車に向けて走り、運転席に乗った。

：

始に言われたとおりにローチ達から避難した天音は、地下通路の中へと逃げのびていた。

まだ怪物達が来る様子はなく、天音は少々ほつとしながら、始のこゝとを心配した。

今頃、始は無事であろうか？

彼に思いをはせる天音は、ふと近づくと足音に気付いた。

驚いて身をすくめながら足音が聞こえた方を振り向くと、天音は胸をなでおろす。

足音の主は、剣崎達と同じライダーの一人・ギャレンの橘朔也だったからである。

「橘さん！」

天音はライダーである彼の登場に安心したが、その安心は次第に陰つていくこととなる。

橘はサングラスを外さぬ無表情のまま、乾いた靴音を立てて天音の前に歩み寄ると、冷徹な視線を彼女へと向けた。

「あの…どうしたんですか…橘さん？」

天音は橘の視線に不安を抱き、声を少し震えさせながら橘に聞くと、橘は不気味な声色で喋りだした。

「君は不思議に思わないのかい？なぜ…自分が何度もアンデッドやアルビローチに襲われるのかを…」

「何を言っているんですか？」

天音は何がなんだか分からず、そう答えた。

橘は無機質な表情のまま、話を続ける。

「君のお父さん…栗原晋は谷川連峰で死んだんだっただね…」

「私のお父さん…何の関係があるんですか？」

天音はまた訳が分からなかった。

なぜ、橘は父のことを知っているのだろうか？

調べるにしても、ライダーの仕事にはあまり関わりのないことだろうに…

しかし橘は、そんなことはないとも言つうように、怪しい微笑を浮かべた。

「君のお父さんは死の直前、封印されていた古代のレリーフの封印を解いてしまったんだ…眠り続ける古代の力の封印を解くには…封印を解いた者の命が必要なんだよ…」

「え？」

「君はお父さんの代わりなんだ…フォーティーンを解放するには、君が必要なんだよ…」

橘が話を終えると、天音は恐怖と驚愕でガクガクと震え始めた。

レリーフ？フォーティーン？それに自分の命が必要？

そんな訳の分からないものために、自分の命が狙われているというのか？

考えれば考えるほど、意味の分からぬ理由で狙われる恐怖が天音を襲った。

そんな時、出入り口の向こうから靴音が聞こえ、二人の下に志村が走りながらやってきた。

「チーフ！僕達だけじゃとても無理です！来てください！」

橘はそれを聞くと、志村に連れられ、惜しげな目で天音を見た後、彼と共に出口に向けて走った。

残された天音は壁に寄りかかり、荒い呼吸を繰り返した。

「始さん…私…怖いよ…助けて…！」

そして始への助けを求め、彼を思い、一筋の涙を流した…

…
橘と志村は剣崎達の支援に向かう為、通路と遊園地を繋ぐ砂利道を走っていた。

だがその途中、濃い白い霧が突如現われ、橘の視界をさえぎる。

「志村！何処だ！？志村！」

橋は必死に志村の姿を探したが、霧が濃く、見当たらない。そんな時、橋の脳天を強烈な痛みが襲った。橋はそのまま地面にどさりと倒れると、その背後には淡白な表情で倒れた橋を見下ろす志村の姿があった。

…
ブレイド、カリス、レンゲルの三人は遊園地でアルビローチの掃討を続けていた。

志村と橋が居らず、戦力的には厳しかったが、三人は弱音を吐かず、山のような数のローチ達を自分達の武器でなぎ払っていく。

そんな中、虎太郎と栞が園内にやって来た。

そして虎太郎はブレイドの姿を見つけると、大声で彼に向けて叫んだ。

「大変だ剣崎君！分かったんだジョーカーの正体が！」
「何だつて!？」

ブレイドは自分の周囲に居たローチを全滅させると、虎太郎に視線を合わせ、驚愕する。

そして栞も、ブレイドに向けて問いかける。

「剣崎君！志村純一は何処!？」
「志村？あいつなら、橋さん呼びに言った。」

ブレイドは栞の問いに答えると、栞は目を大きく開き、「不味い…」と呟いた。

もしも…もしも栞の予想が正しければ…あのダイニングメッセージのとおり、三体目のジョーカーの正体は…

…

一方、トンネルの中で一人立ち尽くしていた天音は、ふと乾いた足音を耳にした。

足音は出入り口の方から聞こえ、ふとそちらを向いてみると、一つの人影があった。

だが、それを見た途端天音の顔が恐怖に彩られた。

その人影は徐々に凶悪な顔を、牙を、爪を持った異形の姿へと変身し、彼女にゆつくりと迫ってきたのだ。

天音は大きな悲鳴を上げ、数秒後に完全に意識を失った。

：

そして天音の大きな悲鳴は、こちらに向かっていった剣崎達の耳にも届いた。

『天音ちゃん！』

「天音！」

剣崎と始、虎太郎が順に叫び、栞、睦月と共に地下通路へとやって来る。

天音は固く目を閉じたまま意識を失っており、志村にその身を抱えられていた。

「大丈夫！気を失っているだけだ！」

志村がそう言うと、剣崎達は志村のそばに来てしゃがみ込み、天音の顔を覗き込んだ。

「天音ちゃん…一体何があった！？」

始は志村に強く詰め寄ったが、志村は分からない、悲鳴を聞いて駆けつけた時にはもうこうなっていたと答えた。

そんな中、栞は橘の事を思い出し、志村に聞いた。

「橘さんは？」

「さっきまで一緒だったんだけど…急に居なくなってる！」

「探すんだ皆！志村、天音ちゃんを頼むぞ！」

剣崎は顔を上げ、志村に天音を託すと、仲間達と共に立ち上がって橘の捜索に向かった。

そして志村は剣崎達の姿が見えなくなるのを確認すると、天音を床に寝かせ、不気味な笑顔を浮かべた。

その瞬間、志村の体が剣崎や始と同じような水に似た歪んだ輝きに包まれた。

その輝きの中で、志村の体は禍々しい装飾の付いた白い体へと変化していく。

やがてその光が水滴のように飛び散り、クリアレッドのフェイスイグアイドに覆われた異形の顔が露わになる。

志村はジョーカーとは左右逆の形状をした姿を持ち、ジョーカーの黒と対する白に体を彩られた三体目のジョーカーであり、56体目のアンデッド・アルビノジョーカーへと姿を変えたのである。

「貰うぞ…貴様の命…」

アルビノジョーカーはそう呟き、天音にその血の様に赤く染められた右手を伸ばした。

だがその手が天音に触れる直前、強烈な二発のキックがアルビノジョーカーの身にぶち当たり、アルビノジョーカーは蹴り飛ばされて天井に張り付いた。

そして志村の姿に戻り、ゆっくりと顔を上げると、そこには先ほど自分に蹴りを放った剣崎と始、倒れている天音の傍に寄り添う虎太郎、栞、そして自分の頭部を抑え、怒りに染まった瞳で志村を睨む

橘と、橘と肩を組み、彼を支えている睦月の姿があった。

「お前が…お前がジョーカーだったのか!？」

剣崎が大声で志村に向けて叫ぶと、志村は剣崎達を睨み、口を開いた。

「…なぜ分かった!？」

天音を看ていた栞は志村の方を向くと、鋭い眼差しで答える。

「殺された二人が握っていたカードよ!」

志村はそれを聞くと、目を大きく開いた。

栞はそのまま説明を続ける。

「4とJ…あれはイニシャルだったのよ!」(し)(むら)(じゅ)(んいち)を表すね!」

志村はそれを聞くと、舌を打ち、表情を歪めた。

そして次に、始が志村に問いかける。

「次の質問はこちらからだ。貴様は一体何者だ?なぜ俺と剣崎の他にジョーカーが居る?」

それを聞いた志村ははにかみながら笑うと、「いいだろう、教えてやる。」と答え、話を始めた。

「俺はアルビノジョーカー、統制者が作り出した三体目のジョーカーだ。」

『統制者…』

剣崎と始は同時に呟くと、自分達を過酷な運命で縛り付ける黒い石版「モノリス」を思い出し、目を細めた。

志村はそれを見て二尾ほくそえむと、話を続行した。

「統制者は貴様ら2体のジョーカーが決着をつけないことに業を煮やし、起爆剤として俺を作った。バトルファイトを進めるためにな。そして俺は貴様らを倒し、バトルファイトの勝者となる為にフォーティーンを手に入れるのが目的だった。」

「ならなぜBOARDを襲った時にキングだけを盗まず、多くのアンデッドを解放した!?!」

橘は睦月から離れ、身を乗り出した志村に向けて叫ぶ。

志村はニヤニヤとしながら橘を見ると、再び喋りだした。

「最初はそうするつもりだった…キングを盗み、さつさとフォーティーンを手に入れて剣崎と相川始を倒すことも出来たさ。だが…それじゃあつまらないだろう?」

「つまらないだと?」

次に睦月が志村に向けて言った。

志村は次に睦月に視線を向けると、話を続ける。

「そうだろう?それじゃああまりにも簡単すぎる。だからどうせならキングを含めたアンデッドを再解放し、もう一度本格的なバトルファイトを開始しようと思ったのさ。人間共の中に潜伏し、ライダ―として戦っていた日々は楽しい余興だったよ。古代の偉大な力に一步一步ゆっくり近づくのも悪くなかった。それに人間だって、難易度の低いゲームはやりたくないだろう?」

「そんな…そんな理由でアンデッドを解放し…多くの人々の命を奪ったのか…！」

剣崎は怒りで声を震わせ、志村を睨んで叫んだ。

「狙うなら俺と始だけを狙えば良いだろう！？それに中東にまでロ―チを送りこんで…多くの人を殺しやがって…！」

「貴様の方から日本に来てくれた方がこちらの手間が省けるからな。その為に、適当にお前が関係した人間達を殺した方が手っ取り早かつたんだよ。全く、虫けらを数匹殺したくらいで挑発に乗ってくれるんだから、貴様も短気なものだな。」

「貴様…！」

剣崎は拳を強く握り締めながら呟き、脳裏に中東でロ―チに喰われた人々の事を思い出し、眉間に皺を寄せた。

そして志村は再び邪悪な笑みを作り、口を開く。

「全員集合と言う訳か…だが…！」

志村は天井から降りて着地し、腰にグレイブバツクルを装着してオープンアップさせるとグレイブに変身した。

「既に四枚のキングは俺の手の中にある！」

グレイブの言葉と共に剣崎達が背後を振り向くと、無数のアルビロ―チ達がワシヤワシヤとした不気味な足音を立て、剣崎達に迫っていた。

しかし、剣崎達四人のライダーは全く恐れなど抱かず、ロ―チ達を睨み、叫ぶ。

『変身!』

劍崎、始、橘、睦月の四人はそれぞれの変身プロセスを組むと、ブレイド、カリス、ギャレン、レンゲルに変身し、自分達のラウザーを構えて戦闘体制に入った。

仮面ライダー達とアルビノジョーカーのラストバトルが、今ここに幕を開けたのである…

…

劍崎達四人は仮面ライダーに変身し、ラウザーを構えると、自分達の左側のコンクリートの壁を攻撃し、巨大な穴をあけた。

その先には機材置場が広がっており、ライダー達は天音を抱えた栞と、虎太郎をその先の出口へと逃がし、自分達は機材置場に残ってローチ達と戦い始めた。

ブレイドとカリスの剣戟、ギャレンの銃撃、レンゲルの鉄槌は凄まじい威力でアルビノローチ達を次々に倒していく。

勢揃いした四人のライダーの前には、有象無象のローチ達など相手にならず、次々に数を減らしていった。

だがローチの殲滅を続けるブレイドに、突如ブレイドが上空から切りかかってきた。

ブレイドはブレイドの斬撃を受け、数歩後ろに下がると、間髪居れずに目前に着地したブレイドによって数発の剣戟をボディに打ち込まれた。

ブレイドはすぐに体制を立て直し、ブレイラウザーを構えると、ブレイドとの戦闘に突入した。

だが、本性を現した志村が変身したブレイドは強く、凄まじい強さでブレイドを追い詰めていく。

ブレイドは危機に陥る中で何とかブレイドのブレイラウザーの刃を自らの剣で受け止め、鏝迫り合いに入ると、自分の傍で戦っているカリスに視線を移した。

「始！天音ちゃんの傍にもローチが向かっているはずだ！天音ちゃんの所に行け！」

「分かった！」

カリスは自分が相手していたローチをカリスアローで切り飛ばすと、俊足で走り、天音の元へと向かっていった。

：

虎太郎達はなんとか遊園地の方まで逃げ延びていた。

三人はここまで繰れば大丈夫かと安心していましたが、その安心は無残に碎け散った。

突如ローチ達が上空から現われ、栞と虎太郎の二人を殴り飛ばしたのだ。

二人はアスファルトに叩きつけられて気絶し、栞が抱えていた天音もアスファルトにどさりと落ちた。

無防備な獲物を目前にしたローチ達はゆっくりと天音に近づき、その身に触れようとす。

だがその瞬間、突然ローチ達が何者かに火花を上げながら跳ね飛ばされ始めた。

「この娘に…近づくな！！」

そう叫んだのは、剣崎達の元を離れ、天音を助けに来ていたカリスであった。

カリスは獣のような激しい激情と共にカリスアローの刃を振るい、アルビローチを倒していく。

そしてスピニングダンスを発動させ、必殺のドリルキックで残ったローチ達を一気に全滅させて地面に着地すると、その異形な赤い目の視線を気絶している天音へと向けた。

赤い目の奥に隠れた瞳からは、まるで兄のように優しい眼差しがあった。

…

一方機材置場から外へと移動したブレイドとグレイブは、未だグレイブ優勢のまま戦いを続けていた。

グレイブは叩き込むように剣を振るい、ブレイドを何度も斬りつけていく。

反撃の隙の無いブレイドは、ただこの攻撃を享受し、機会を狙うことしか出来なかった。

そんな中、グレイブの剣先がブレイドの胸部に突き込まれ、ブレイドは三メートルほど吹っ飛ばされてアスファルトの上を転がった。

ブレイドはブレイラウザーを杖代わりにして立ち上がったが、グレイブはカードホルダーを展開し、「マイティグラビティ」のカードを取り出してラウズしていた。

ラウズと動じにカードホルダーが閉じ、グレイブの前にケルベロスが描かれた紋章が現われると、紋章はグレイブラウザーに吸い込まれる。

そして刃が金色に染まると、グレイブは叫び声と共に上空へとジャンプした。

この「グラビティスラッシュ」が当たれば、ブレイドでもただではすまない。

しかしブレイドはこの一瞬を好機と伺うと、左手に装備したラウズアブゾーバーからスピードJ「フュージョンイーグル」、スピードQ「アブゾーブカプリコーン」を取り出し、Qのカードをアブゾーバーに装填し、Jのカードをアブゾーバーのカードリーダーにラウズする。

『AbsorbQueen! FusionJack!』

そして電子音声が流れると、クイーンがセットされたアブゾーバーの中央部に鷲の紋章が現われた。
それと同時にブレイドの胸部と頭部のアーマーも金色に染まり、胸に鷲の紋章・ハイグレイドシンボルが刻まれ、背に赤い六枚の翼が現われる。

手に持ったブレイラウザーの切っ先も、より鋭い切れ味をもつディアマウンテゴールドへと強化されていた。

ブレイドはラウズアブゾーバーで上級アンデッドの力を使い、強化変身してジャックフォームへと進化したのである。フォームチェンジ

ブレイドジャックフォームは六枚の翼・オリハルコンウイングを広げ、空に飛び立った。

さらに、「スラッシュリザード」、「サンダーディアー」のカードを取り出し、強化ブレイラウザーにラウズする。

『Slash!thunder!』

そして二枚のカードを読み込んだブレイラウザーから電子音声が流れ、ブレイドの剣に凄まじい雷が纏い、激しくスパークした。

「うおおおおおお…ウエイ!!!」

ブレイドは飛行しながら高速でグレイブへと突進すると、すれ違い様にグレイブのバックル部に稲妻の剣を叩き込んだ。

通常のライトニングスラッシュを超えた威力を誇るブレイドジャックフォームの必殺技、「ジャックJ・ライトニングスラッシュ」である。

「うわあああああああ!!!」

上空での一騎打ちに敗北したグレイブは固いアスファルトへと叩きつけられ、爆炎に包まれた。

ブレイドは着地し、翼を閉じると、グレイブの方に視線を視線を向けると、グレイブは炎の中でゆっくりと立ち上がっていた。黒く焼け焦げたグレイブアーマーは粉々に砕け、その下からアルビノジョーカーが現われると、アルビノジョーカーは赤い光に包まれ、上空へと浮遊して何処かへと飛び去っていった。ブレイドは通常フォームに戻ると、アルビローチの掃討を終えたギヤレン、レンゲルと合流し、天音の拉致に向かったアルビノジョーカーを追った。

…
天音を救ったカリスは、遊園地から少しはなれた川辺に来ていた。彼女をローチ達の手が届かない場所に逃がす為である。そして川の傍に着き、彼女を柔らかい地面の上に寝かせると、始の姿に戻り、しゃがみ込んで彼女の頬に触れた。

「天音ちゃん…良かった…」

始は天音が無事であることに安心し、柔和に微笑んだ。ここならローチの手も届かないだろうし、自分も剣崎達が来るまで彼女の傍にいるから安心だと思った。だがその安心も長くは続かなかった。突如白い霧が発生し、始の背に光弾が撃ち込まれたのだ。

「ぐお…！？」

始は天音に覆い被さるように倒れると、彼の背中には大きな焦げた痕が付いていた。

「油断したな！」

光弾を発射したのは始の数メートル背後に現われたアルビノジョーカーであり、始の油断をあざ笑った。始はゆつくりと立ち上がると、後ろを振り向き、アルビノジョーカーを凄まじい見幕で睨む。

「貴様：！」

始は体に水に似た輝きを纏い、それを弾けさせて剣崎と同じ黒いジョーカーに変身すると、唸り声を上げながら、専用の小型鎌・マンティスを構えアルビノジョーカーに立ち向かった。

「ウオオオオオオ！！」

ジョーカーは怒りの叫びを上げ、アルビノジョーカーに組み付いて敵と共に川の浅瀬へと戦う場所を移動した。

そしてアルビノジョーカーをマンティスを振るって攻撃したが、アルビノジョーカーは落ち着いた動きでそれを回避し、アルビノの専用武器である長槍を手に出現させ、鮮やかな槍捌きでジョーカーに剣戟を浴びせて行く。

いくら同じジョーカーでも、始は不意打ちを受けている為、満足に戦えないのである。

どんなにマンティスを振るっても、すべてが避けられてしまうか、槍によって防がれてしまい、ジョーカーはアルビノの凄まじい反撃に手も足も出なかった。

やがてジョーカーはマンティスを手から弾き飛ばされ、アルビノジョーカーの強烈なキックを受けて数メートルほど蹴り飛ばされて水面に激突した。

それでもジョーカーは必死に膝を付いて立ち上がり、アルビノジョーカーを睨みつける。

アルビノジョーカーはそんな彼を見て馬鹿にするように鼻で笑うと、

右手の掌をジョーカーにゆっくりと向けた。アルビノジョーカーの手には掌と同じサイズの光弾が生成され、それは無数に発射されてジョーカーを襲った。

「グウアアアアアアアアアア！」

連射された光弾の直撃を受けたジョーカーは水面にうつぶせに倒れ、始の姿へと戻った。

勝利したアルビノジョーカーは水面から陸地に上がると、気絶している天音に向けてゆっくりと近づいていく。

「天音ちゃん……」

始は天音の名を呟きながら起き上がり、四つんばいで歩きながら川岸まで上がったが、ダメージが大きく、助けに行くことが出来ない。そしてアルビノジョーカーは天音の傍まで来ると、4枚のキングを取り出し、それを天音に向けて落とした。

キングのカードは四方に並び、巨大な長方形のカード型の結界を生成した後、四つのキングの昆虫達の絵柄が一つになってバニティカードとなる。

バニティカードは天音の体を不気味な光で吸い込み、何も書かれていない白紙に、茨に体を拘束された女性の絵が描かれると、アルビノジョーカーの手元に飛び、彼に掴まれた。

「天音ちゃん！」

始はバニティカードに手を伸ばして叫び、同時にブレイド達三人のライダーも到着した。

だが既に遅く、アルビノジョーカーは再び浮遊し、飛び去っていった。

「天音ちゃん！」

ブレイドも天に向けて彼女の名を叫ぶと、始はどさりと川岸の地面の上に倒れた。

「始…始…！」

ブレイドはそれに気付くと、ギャレン、レンゲルと共に始の傍に行き、しゃがみこんで彼の肩を掴み、起こした。

「ブレイド…剣崎…」

「まだおねんねするには早いぞ！立て！」

ブレイドは彼の肩を持ったまま立ち上がり、始を無理やりと立たせる。

そして彼の瞳を見つめ、力強く言った。

「行くぞ…！」

…

四人のライダーは専用マシンを駆り、新生BOARD本部に向かう車道を爆走していた。

ブレイドのブルースペイダー、カリスのシャドーチェイサー、ギャレンのレッドランバス、レンゲルのグリーンクローバー。

最新テクノロジーで作られたスーパーマシンとアンドロイドの特殊な力で強化されたマシンは四台で並走し、凄まじい爆音を上げる。

全てのカードを手に入れたアルビノジョーカーの最後の行き先は、レリーフの保管先である本部である。

仮面ライダー達は走った。

全てはアルビノジョーカーを倒し、世界に平和をもたらす為に…

第7話（後書き）

今回は大幅に新規文章追加です。普通はこれが当たり前ですが…
それからムービー大戦、今更ながら見てきました。

大シヨツカーと言い財団Xといい、これらの組織はクロスオーバー
に絡ませるのに便利すぎる…

しかしプロトバース…せっかくフィギュアーツ予約したのに（涙）

思ったより短かったために、新話は文章追加という形にしました。
次回、フォーティーンとのバトルとなります。

第8話

ついにバニティカードを手に入れたアルビノジョーカーは、セキユリティを破壊しながら本部の地下の保管庫に到着した。そして保管庫の中に悠然と立つレリーフに歩み寄ると、バニティカードを取り出した。

「さあ…俺の物となれ…古代の偉大な力よ。貴様の復活のために、人間の命を捧げよう！」

アルビノジョーカーはカードをレリーフの中心にセットすると、レリーフは大きな物音を立ててゆれ始めた。

その後、セットされたカードから不気味な光が放たれ、それはアルビノジョーカーを吸いこんで天へと昇り始めた。

光は施設の天井を突き破り、大気圏に出ると、宇宙空間で巨大な怪物を形作り、地球へと降りていった…

…

四人のライダー達はそれぞれのマシンを走らせていた。

その中でカリスは、ハンドルを握る手を握り締めて呟いた。

「天音ちゃん…必ず…必ず助ける！」

そう呟いたカリスの瞳には大事な人を必ず助けたいと思う人間としての愛情と、天音を捕らえ、自分の欲望のために利用したアルビノジョーカーへの怒りがあつた。

そんな中、先頭を走っていたブレイドは急激に曇っていく空を見上げ、本部の上空に怪しい渦が発生し、その中心から不気味な光がスパークしていることに気付いた。

「あれは!？」

ブレイドが叫ぶと、四人のライダーはさらにマシンの速度を上げ、その渦が発生している方角へと向かった。

：

十数分ほどの時間をかけ、ライダー達は本部付近の断崖の上に到着し、マシンを停めて降りた。

そして四人は共に肩を並べながらその渦を見上げた。

渦からは強烈な邪気が発せられ、見るものに得体の知れない威圧感を与える。

四人の仮面ライダーは拳を握り締め、息を呑むと、その渦から突如紫色の巨大な炎の球体が出現した。

その球体は徐々にスピードを上げ、ライダー達に向かって一直線に接近してくる。

ライダー達は一斉に動いてそれを回避したが、その50mはありそうな球体が通り過ぎた後の猛烈な風圧に押され、10m以上の距離を吹っ飛ばされた。

四人は地面に激突し、海の水面に移動し、大きな水飛沫を上げて水面を移動する物体に視線を移すと、ブレイドが声を上げた。

「何だあれは!？」

球体は海に飛び込むと、その波紋から光柱が上がり、それが消えた後、曇った空からは激しい雨が降り始め、雷鳴が鳴り響いた。

そしてその直後、海からは大剣と聖杯を持った体長50m以上の巨大な四つ腕の白い怪物が出現した。

それを目にしたギャレンは古代の力の復活を確信し、叫ぶ。

「蘇ったんだ！眠っていた古代の力が！」

この巨大生物こそ、古代、統制者によって作られた究極の生物兵器・フォーティーンである。

その形相はこの世の物とは思えないほど禍々しく、四つの腕は生々しく動きながら、上側の両手にそれぞれ持った剣と聖杯を構え、長い尾は蛇のようにシユルシユルと蠢く。

そしてその胸部には、まるで十字架に磔になっただかのようにアルビノジョーカーが吸収され、ライダー達を見下ろしていた。

「もはや誰も俺の力を封印することは出来ない！クツハツハツハツハツハツハツハ！！」

アルビノジョーカーの下卑た笑いと共にフォーティーンは腹部から火球を発射し、ライダー達を攻撃し始めた。

ライダー達は散会し、回避行動をとったが、フォーティーンが放つ巨大な火球は何発も連続で発射され、ライダー達を攻撃していく。ブレイドとカリスは何とか火球の直撃を避け、岩陰に隠れることに成功したが、ギャレンとレンゲルは若干逃げ遅れてフォーティーンに接近され、フォーティーンが持った大剣の攻撃を足場に受けた。

『うわあああああああ！？』

足場を壊されたギャレンとレンゲルは壊された地面から出来た傾斜を土砂と共に転がっていった。

「橘さん！睦月！クツ…！」

カリスと共に地面に伏せていたブレイドは、拳を握り締めながらフォーティーンを睨み、叫んだ。

「どうすればいい！何か奴の…弱点はないのか!？」

今はキングのカードがないため、ブレイドもカリスも究極の姿へとフォームチェンジすることが出来ない。

そのため、今は敵の弱点を見つけ出し、倒すしかないのだが、今の自分たちの力ではフォーティーンに取り付くことなど出来ないだろう。

ブレイドが悔しさに仮面の下の唇を噛む中、カリスが立ち上がってブレイドを見下ろし、言った。

「付いて来い！最後の望みだ！」

カリスその言葉と共にブレイドに背を向け、フォーティーンが飛び出した際に破壊されたBOARD本部に向かった。

ブレイドも親友であるカリスの言葉を信じ、地面から立ち上がると、彼の後を大急ぎで追った。

…

二人が着いた先は、本部の地下保管庫だった。

入り口は無残に破壊され、天井にも大きな穴が開いて激しい雨が室内に降り注いでいる。

そしてその中心には、瓦礫の直撃で半壊したレリーフがあり、その中心にはバニティカードが不気味に輝いていた。

変身を解除していた剣崎と始はレリーフの前で立ち止まると、剣崎の前にいた始が剣崎の方を振り向き、口を開いた。

「扉が開かれた今も、奴の力はこのカードによって維持されている。カードに宿った命を殺せば…奴の力は弱まるはずだ。」

「!?!、殺すだって!?!」

それを聞いた剣崎は始の肩を強く掴んで抗議した。

「馬鹿な！このカードの中には天音ちゃんがいるんだぞ！！」

「俺達が入れ替わるんだ！」

始は剣崎の手を振りほどき、強く叫んだ。

剣崎はそんな始の瞳を見ると、再び叫ぶ。

「そんな…出来るのかよ！俺達はアンデッドだぞ！出来るのかそんなことが！？」

…

一方、ギャレンとレンゲルは無事ではあったが、未だにフォーティーンの火球攻撃に晒され、危機に陥っていた。

二人ともなんとか凌いではいたが押される一方であり、反撃の手段は何一つなかった。

そんな中、フォーティーンは左の上の手に持った聖杯を掲げ、それからすさまじい雷を発射した。

『うわああああああ！！』

その雷は二人の足元に直撃し、激しい爆発でギャレンとレンゲルは吹き飛ばされた。

…

「こいつは命を求めるカード…俺達が命を投げ出せば、カードは俺達を求める。その時に身代わりの命として俺達を差し出し、天音ちゃんを助けるんだ。」

始の言葉が終わると共に、剣崎は表情を固まらせた。そして始は剣崎を見つめ、再び話をはじめめる。

「剣崎：かつてお前は言ったな。自分の命を顧みずに誰かを助けることは素晴らしいことだと…今なら俺もそう思う。」

剣崎はその言葉を聞き、かつての始を思い出していた。

闘争本能や勝利への渴望だけでライダーやアンデッドと闘い、自分と敵対していたころの始を…

しかし、今の彼は違う。

剣崎のように、愛する人を護るなら自分を捨てられる優しい心を持っている。

「正直に言えば…俺は死にたくない。例え時間が過ぎ去っていく中で、天音ちゃんの元からはいつか去らなければならぬと考えるなら、今はある意味好機かもしれない。だが…それは天音ちゃんとの約束を破ってしまうことになる…俺がいなくなっって悲しむ天音ちゃんを考えると、悔いは拭いきれない…」

始は天音の笑顔を脳裏に思い浮かべ、拳を握りしめた。

「だが、これしか方法はない…天音ちゃんを助けるためなら、俺は喜んで犠牲になる。」

剣崎は悔しかった。

本来なら自分が始の代わりに犠牲になりたいが、今の二人はジョーカー…どちらかが生き残れば世界は滅びる。

二人で犠牲にならなければ、世界は滅びてしまうのである。

「決着を付ける気がないのなら両方とも滅びてしまえ」…そんなメッセージが今の自分達の運命から伝えられたような気がした。

これが、統制者の用意したバトルファイトの結末なのであるうか？

「剣崎…お前も犠牲にしたくはない…だが、一緒に死ななければ、この世界は…」

「分かってるよ、始。」

剣崎は笑顔を見せ、始の言葉に頷いた。

「確かに、これしかもう方法はない。運命に勝てないのは悔しいけど…天音ちゃんを助けるためなら、俺の命なんて安いもんだ。」

天音を助けるためにそれしか方法がないなら、それを取るしかない。剣崎にとって何より大事なのは人の命なのである。

「剣崎…すまない…」

始は唇を噛みしめ、剣崎に頭を下げた。

剣崎はそんな始の左手を右手で握り、優しく囁いた。

「始…お前を一人にはさせない…死ぬ時は、一緒だ。」

「…ああ、剣崎。一緒に行こう。」

同じジョーカーであり、強い絆で結ばれた親友同士である剣崎と始…二人は凛々しく表情を引き締め、手を繋いだままレリーフに歩み寄り、ゆっくりとその前に立つと、両腕を広げ、同時に叫んだ。

『さあ、俺達の命を変わりに!』

するとバニティカードからオリハルコンエレメントと同サイズの結界が二人の前に現れた。

二人はバニティカードが自分達の命を求めているのだとすぐに理解し、結界に向けて足を進め始めた。一步一步歩く中で、自分達がいままで出会ってきた人々のことを思い出していた。

虎太郎、栞、天音、遙、橘、睦月：

全て、忘れられない大事な人たちだ、

彼らを残して逝ってしまうのは心が痛むが、今はもうこれしか方法がないのだ。

例え自分を犠牲にしても誰かを助ける。

それが剣崎と始、仮面ライダーの在り方なのである。

やがて二人は、結界の目前に立ち、その身を委ねようとした。

しかしその時、予想もしなかった事態に発展する。

命を飲み込むはずの結界が、二人のアンデッドの命を受け入れず、その身を弾き飛ばしたのである。

『ぐあつ！？』

剣崎と始は瓦礫のつぶてが転がる床へと叩きつけられ、自分達を受け入れなかった結界に視線を移した。

その結界はまるで乱れた映像のように、その紫の光にノイズを走らせ、次第にグニャグニャと歪み始めたのである。

やがて結界は消え、バニティカードがレリーフから放出されると、カードは4枚のKのカードへと分かれ、その中に幽閉されていた天音を解放した。

「天音ちゃん！」

始は天音すぐに立ち上がって天音をキャッチすると、彼女の名を呼びながら体を揺すった。

そして天音が何回か咳払いをし、息をしていることを確認すると、

始は天音を抱きしめた。

「天音ちゃん…良かった…」

剣崎も胸をなで下ろし、天音の無事に安堵した。
しかし…

「でも始…これは一体…？」

剣崎は新たに疑問を抱いた。

バニティカードは命を求めるカードのはず…

だが変わりの命を受け入れるどころか、突如異常を起こして天音を解放した。

一体何故？

「分からない…俺にもどうなっているのか…」

始にも訳が分からなかった。

不完全な人間が作る無機質な機械とは違う。統制者が作り出した古代のシステムがこんな異常など起こすことはないはずだ。

「だが、これで奴の力は弱まったはずだ…剣崎！奴を倒すぞ！」

「…ああ！細かい事なんて今は後だ！」

しかし、なににせよ今はフォーティーンを倒さなければなせない。

誰の命も失わずにこの状況を打開できたことは、むしろ喜ばしい事態だ。

今こそ、フォーティーンを倒し、アルビノジョーカーの野望を砕くときである。

天音を施設の床に安置すると、剣崎と始は戦っている橋と睦月の元

へと急いだ。

…
ギヤレンとレンゲルは橋と睦月に戻り、地面に倒れて痛みにもがいていた。

もはやこれまでか…二人はそう思ったが、その瞬間雨雲が晴れ、突如フォーティーンが苦しみ始めた。

「何だ！？どうしたんだ！？」

融合していたアルビノジョーカーは急激なフォーティーンのパワーダウンに戸惑い、フォーティーンと共に苦しみ始めた。

橋と睦月は立ち上がり、フォーティーンの異変を見ていたが、そんな二人の前に剣崎と始が駆けつけた。

「橋さん！」

「睦月！」

「剣崎！」

「相川さん！」

二人は橋と睦月の傍に駆けつけると、揃った四人は苦しむフォーティーンを見上げた。

そして剣崎は鋭い眼光でフォーティーンを睨み、叫んだ。

「アルビノジョーカー！フォーティーンの力の源は断った！あとは俺達、仮面ライダーがお前を倒す！」

「おのれえ…この虫ケラ共が！！」

胸部のアルビノジョーカーは、悔しみに染まった声色で怒り、剣崎達を睨んだ。

「皆…行くぞ！」

『おう！』

そして剣崎の雄叫びに始達が相槌を打ち、4人はそれぞれの変身プロセスを組んでいく。

剣崎はスペード、橘はダイヤ、睦月はクラブを象った変身ポーズを取り、始もAのカードをベルト中心のハートにスラッシュする。

『変身！』

変身…人から戦士に変わるための勇者の言の葉を4人は叫び、スペード、ハート、ダイヤ、クラブの4つの紋章がそれぞれの変身ベルトに輝いて、電子音声が鳴り響く。

『Turn up!』

『Turn up!』

『Open up!』

『Change!』

剣崎、橘、睦月のベルトからはそれぞれのAアンデッド達のシンボルマークが描かれたエネルギースクリーンが現れ、始は流麗な水の流れに似た輝きを体に纏う。

そして剣崎はエネルギースクリーンを潜り抜けてブレイドに、橘はギャレンに、睦月はレンゲルに変身し、始は透明な輝きの中でカリスへと変身を遂げる。

変身完了！悪を倒すための準備は整った。

『うおおおおおおおおおおおおおおお！』

4人のライダーはフォーティーンに向けて雄叫びを上げながら疾走し、ブレイドとギャレンはラウズアブゾーバーからJのカード、カリスは先ほど取り戻したハートのKのカードを取り出した

「Fusion Jack!」

「Fusion Jack!」

「Evolution!」

ブレイドとギャレンはアブゾーバーにJのカードをラウズしてジャックフォームへと変身し、カリスはバニティカード破壊時に取り戻したKのカードをバツクルにラウズする。
するとカリスのラウズバンクから十三枚のハートのカードがカリスの頭上に浮かび、体に吸い込まれる。

そしてカリスの黒い体は鮮やかな赤に変わり、目は緑に彩られ、角は刺々しい金色に変化し、胸部の鎧は頑強に強化され、胸には緑色のパルドキサマンティスの紋章ハイクレイドシンボルが輝いていた。

カリスは13体のハートのアンデッド達と融合し、最強フォームである「ワイルドカリス」に強化変身したのである。

さらにワイルドカリスは「フロートドラゴンフライ」のカードを取りだし、レンゲルに渡すと、レンゲルはそれをレンゲルラウザーへとラウズする。

「Float!」

これで強化フォームを持たないレンゲルも飛行能力を得、空中での戦闘が可能になった。

Jフォームに変身したブレイドとギャレン、飛行能力を得たレンゲルと、60mの驚異的なジャンプ力を持つワイルドカリスは、一斉にフォーティーンに飛び掛った。

四人のライダーはフォーティーンの放つ火球や雷を回避しながら胸部のアルビノジョーカーの元にたどり着くと、強化型ブレイドラウザー、強化型ギャレンラウザー、ワイルドスラッシュャー、レンゲルラウザーをそれぞれアルビノジョーカーに向けて突き出した。

だがその攻撃はアルビノジョーカーが張ったバリアに妨害され、四人はその威力に競り負けて再び地上へと落ちていく。

やがて四人は地面に激突し、ダメージを追ったが、ブレイドはすぐに立ち上がり、アブゾーバーから先程戻ってきたスピードK「エボリューションコーカサス」を取り出した。

そしてそのカードをラウザーにラウズすると、再びアブゾーバーから電子音声が発せられる。

「Evolution King!」

その音声と共に、ブレイドのバツクルからA〜Kまでの13枚のスピードのベスタが出現し、ブレイドの頭上に円を作って回り始める。そしてカード達は次々にブレイドの体に張り付いていき、ブレイドのアーマーに融合していった。

剣崎の持つさまざまな融合係数が、13体のアンデッドとの融合を可能にし、ライダーアーマーを進化させているのだ。

右手にJ、10、3、左手にQ、2、右足に5、6、7、左足に4、8、9…

融合するアンデッドの力はブレイドの力を極限まで高め、金色の鎧を形作っていく。

最後にKのカードが胸部に融合し、胸に黄金のコーカサスオオカブトの紋章が刻まれると、ブレイドの手にブレイラウザーを超える大きさの切れ味を誇る黄金の剣・重醒剣キングラウザーが握られた。

仮面ライダーブレイドキングフォーム：13体のアンデッドと融合し、究極進化を遂げたブレイドの最強フォームである。

その金色の鎧は見る者を圧倒し、強大な悪をも粉碎する驚異的な力

を發揮する。

ブレイドはこの究極の姿を駆使して今まで数々の強敵達を討ち滅ぼし、世界と始を救うためにこの姿がはらむリスクでアンデッドの体を手に入れたのである。

ブレイドはフォーティーンに向けてジャンプすると、背中のグラピティージェネレーターを起動させ、重力制御で滑空する。

そしてフォーティーンの頭上にたどり着くと、体のアンデッドクレストからスピード10、J、Q、K、Aの5枚のギルドラウズカードを出現させ、その手に取ると、キングラウザーにラウズした。

「Spade 10、J、Q、K、A… Royal Straight Flush!」

ブレイドが頭上に剣を構えると、刀身が輝き、フォーティーンの前に10、J、Q、K、Aの5枚のカードの紋章が出現し、ブレイドはそれを潜り抜けていく。

そして紋章を潜り抜けるたび、ブレイドの体は金色に輝いていく…

「うおおおおおおお!! ウェーーーーーーーーーー
ーーーーー!!!」

ブレイドはフォーティーンの脳天に剣を突き立てると、そこから一気に降下し、縦一閃にフォーティーンを切り裂いた。

ブレイドの一撃は、フォーティーンの頭部から尾にかけ、金色の傷痕をフォーティーンに刻み込む。

この一撃こそブレイドキングフォームが放つ究極コンボ、「ロイヤルストレートフラッシュ」だ。

ブレイドは剣を振り下ろすような形で地面に着地すると、フォーティーンは断末魔の雄叫びを上げ、ブレイドが付けた傷からは凄まじい炎が燃え上がる。

「グアアアアアアアアアアアアアアア！」

融合していたアルビノジョーカーも炎に焼かれ、苦しみの叫びを上げる。

まるで、聖なる炎に焼かれて消滅していく悪魔のように…

やがてフォーティーンは金色に輝きながら、巨大な爆発と共に完全に消滅した。

フォーティーンとアルビノジョーカーは、仮面ライダー達の力によってその歪んだ野心と共に滅び去ったのである。

ブレイドキングフォーム、ワイルドカリス、ギャレンジャックフォーム、レンゲル…

戦いを終えた四人のライダーは共に肩を並べ、沈む夕日にその鎧を照らされた。

オレンジ色の光は夕日がその姿を隠すまで、悪魔に勝利し、平和を守り抜いた勇者を祝福するように、四人のライダーの姿を勇ましく輝かせていた…

第8話（後書き）

ちよつとご都合が過ぎますが理由は次回明らかにします。
次回…最終回です。

最終話

フォーティーンを倒した数日後：天音の誕生日当日、ハカラランダでは天音の誕生パーティーが盛大に開かれていた。

ハカラランダには戦いを終えた戦士達と、そのサポートをした仲間達、そして、意識を取り戻した天音の姿が揃っていた。

始、橘、睦月、虎太郎、栞：皆がパーティー用の仮装をし、天音や、天音の母の遥と共に食卓を囲んでいた。

そしてパーティー用の豪華な料理がある程度食べ尽くされたあと、ピンクのシャツとヴィンテージ物のジーンズを身につけ、アフロのかつらを被った虎太郎が椅子から立ち上がり、大声で喋った。

「それでは！ケーキのご登場です！姉さん！広瀬さん！広瀬さん！お願いします！」

虎太郎は右手を上に掲げ、指を鳴らすと、白いチャイナドレスを着た栞と、普段のように年相応の落ち着いた雰囲気私服を身につけた遥が食卓から立ち上がり、店の厨房に向かう。

それから少しして、栞と遥が天音の顔写真が張られた巨大なバースデーケーキに乗ったカートを引いてきた。

食卓からは天音達の歓声が沸き、やがてケーキは食器が片付けられたテーブルに載せられた。

そしていつものどおりの服を着た始、テンガロンハットと革のジャケットを身につけた橘、赤い蝶ネクタイを締めた白いシャツと黒の半ズボンを着た睦月の三人が、チャッカマンを使い、ケーキに立てられた十四本のろうそくに手分けして火をつけると、遥が店の明かりを消した。

始達が食卓に着いた後、天音は大きく息を吸い込んで、ケーキのろうそくに何度も強く息を吹きかけていく。

やがてろうそくの火を全て消し終わり、皆からの拍手と歓声が天音を祝うと、遙は再び店内の照明をつけた。

「ありがとうみんな！」

天音は満面の笑顔で皆に感謝の言葉を伝え、始もそれを見て微笑んだ。

だが、天音はふと表情を暗くし、俯いた。

「天音？どうかしたの？」

食卓についた遙は、天音の様子が気になり、母親らしい娘の様子を心配した口調で尋ねる。

そして天音は、寂しそうにぽつりと口を開いた。

「剣崎さん…来てくれなかったね。」

剣崎の名が天音の口からこぼれた途端、始、橘、睦月、虎太郎、栞は表情を曇らせた。

フォーティーンを倒した後、剣崎はブレイバツクルとスピードのカードを橋へと返却し、また何処かへと姿を眩ませた。

アルビノジョーカーが倒れた今、始と一緒に居れば闘争本能が掻き立てられ、最後のバトルファイトを始めてしまう。

剣崎が、天音の誕生日が終わるまで日本に留まる事は許されなかったのである。

始達もそれは分かっていたが、事情を知らない栗原親子にその事を伝えることはできなかった

「剣崎…」

始はふと去っていった親友の名を小声で呟き、彼が座る筈であった自分の向かい側の席を見つめた。多くの人達が食卓を囲む中、たった一つだけ誰も座っていない席からは、何か物悲しい雰囲気漂っている。すると皆の間に湿っぽい雰囲気が漂う中、遙が何かを思い出したように顔を上げた。

「そっぴいえば！」

遙は椅子から立ち上がると、店のカウンター席の隅へと向かい、テーブルの上に置かれた小包を手に取り、天音の元へと持ってきた。

「お母さん、何それ？」

「今日のお昼に届いたんだけど、お店が忙しかったから忘れてたのよ。この小包、天音宛なのよ。でも差出人が書いてなくて……」

「え？」

天音は小包を受け取ると、伝票を見た。確かに自分の名が宛先に書かれているが、差出人の名も住所も記されていない。

天音は疑問を覚えながらも、小包のガムテープをはがし、開封した。

「これって……」

そして中身を取り出すと、天音は目を丸くし、始も顔を上げて入っていた品を見つめた。

小包の中に入っていたのは、青いリボンを開け口に巻いた透明なプラスチック袋に入れられた猫のぬいぐるみであった。

このぬいぐるみは、天音がアルビノジョーカーにさらわれる前、クレーンゲームで取れなかった物と同じぬいぐるみである。

そして天音は、小包の中に一枚のバースデーカードがまだ入っていたことに気づいた。
それを取り出して表紙を開くと、それには少し稚拙な文体の字でこう書かれていた。

『天音ちゃん誕生日おめでとう！約束守れなくてごめんね。お詫びといっっては何だけど、天音ちゃんが欲しがっていたぬいぐるみをプレゼントに送ります。それじゃあ元気でね！皆によろしく！ 剣崎 一真』

その内容に天音は少し慌てながら、バースデーカードの差出人の名前を口にした。

「剣崎さんからだ！」

天音の一言に始達は驚愕し、一斉に彼女の周りに集まってバースデーカードのメッセージを見つめた。

「剣崎君…天音の誕生日忘れてなかったんだ！」

「もう！水臭いんだから！」

虎太郎と栞は少し目を潤ませながら、剣崎の姿を思い浮かべた。

「橘さん…いつか、剣崎さんを助けられる日が来ますよね？」

「ああ…始も剣崎も、きっと俺が助けてみせる…！」

橘は剣崎を救いたいという睦月の願いに強く頷き、これからも一層剣崎と始を救うための研究に尽力することを誓う。

「剣崎…お前だけを戦わせたりはしない…俺も戦う。」

始はいずれ訪れる「不死の孤独」という逃れられない運命との戦いに臨む事を改めて決意した。

橋の研究が剣崎と自分を運命から解放するのが先か、自分達が運命が与えた試練に挑むのが先か、今の始には分からない。

しかし、剣崎だけに運命との戦いをさせはしない。

その戦いの先にある物が希望であろうと、絶望であろうと、戦いは剣崎がアンデッドとなった時にもう始まっているのだ。

これから何が待ち受けているかは知らない。だが、自分達はまだ待ち受けているものを知りすぎてもいない。

与えられる試練を知らないという罪はあるが、訪れる結末という知りすぎる畏にはまだ陥れられてはいないのだ。

4人の仮面ライダー達は、運命の畏に絡めとられて動けなくなる前に、新たな戦いへと動き出す。

新たに配られた運命のカードは、抗う戦士達を占うように笑う…

しかし、風に捲られたカードがゴールに辿り着くのはまだまだ先の話である。

戦士達はこれからも運命に惑わされ、難解な迷路を迷いながら、それでも明日を探し、生きていくのであった…

…

それからさらに数日がたったある日、中東に戻った剣崎は、自分のバラックの中で必要な荷物をまとめていた。

そろそろ別の国へと移動し、そこで苦しめられている人達を救いたいと考えたのである。

しかし、理由はそれだけではなかった。

この国での思い出は辛い…自分が居たせいで多くの人達を死なせてしまった。

今の自分では、今より多くの人々を救うしか償う術を知らなかった。幸いこの国の治安は少しだが安定してきている。

暫くは平和な生活が続くであろう。

だから自分はこの国を離れ、助けを必要とする人々を救うために旅立つことを決めたのであった。

やがて必要な物すべてをポロポロのバッグに詰めた剣崎は、立ち上がって入り口へと歩み寄る。

そして板で出来た引き戸を開けると、そこには予想もしていなかった人物の姿があった。

自分がよく手伝いをしていた村の住人で、自分のジョーカーへの変身を目撃した幼い少女である。

「君は…」

剣崎は驚いていた。

この少女は日本の遊びを教えてくれた自分に懐いていた少女であったが、あの姿を見られた以上、もう自分の元を訪れてくれないと思っていたからである。

剣崎は呆然としながら少女を見つめ続けていると、少女は俯いたまま恐る恐る口を開いた。

「カズマ…どこに行くの？」

少女は普段自分が喋っている少し不器用なアラブ語で剣崎に問う。

剣崎は寂しげな笑顔を少女に見せると、ゆっくりと頷いて、アラブ語で少女に答えた。

「うん、ここを出るんだ。」

「！？…ミンナが、カズマにヒドイことしたから？アタシがカズマがオバケになるトコみたから…？」

少女は瞳に涙をためると、唇をかみ締める。

そして、やがてためた涙を滝のように流しながら、剣崎に訴えかけた。

「アタシはカズマがなにかなんてキにしてないよ！それにカズマのことだってムラのミンナにナイシヨにするよ！だから…イなくならないですよ！」

「え…？」

剣崎は驚き、目を丸くした。

今まで、ジョーカーの姿を見た人々も、自分の正体を仲間達以外の知った人々も、その異形の姿と体を恐れ、それまで築いて来た信頼に掌を返すように罵倒や迫害をしてきた。

しかしこの少女は違う。剣崎がジョーカーになる姿を目撃した今も、剣崎を信頼し、ここに留まって欲しいと涙を流しながら頼み込んでいるのだ。

なぜ化物である自分を引き止めるのか？分からなかった剣崎は、ふと少女に聞き返していた。

「なんで…俺なんかの為に…」

少女は数回嗚咽を繰り返し、涙で充血した瞳で剣崎を見つめると、鼻をすすりながら答えた。

「カズマがカナシイの…ワカッタから」

少女は感情が爆発しそうな自分を抑え、必死に言葉を紡ぐ。

「カズマがクルシイの…ワカッタから…！」

少女はその言葉を言い終わると共に、地面に膝を付けて泣き崩れた。

「…もう、泣かないでくれよ。」

剣崎は地面に片膝を突くと、少女の頭に優しく手を置いた。

「俺なんかの為に…泣かないでくれよ…」

それから少女が泣き止むまで、剣崎は彼女の頭を撫でながら、優しく慰め続けた…

…
少女の号泣がようやく収まると、剣崎は立ち上がり、少女に微笑んだ。

「じゃあ、俺は行くよ!」

「ヤダ!ゼツタイヤダ!」

少女は剣崎の足にしがみつき、必死に彼を引きとめようとした。しかし、剣崎は少女に優しく囁く。

「俺は君や村の人達が嫌いになつたから、ここを出て行くんじゃないよ。」

「じゃあナンデ!？」

「…この世界にはまだ苦しめられている人達が沢山居るんだ。俺はその人達を助きたい…俺の力じゃ出来ることなんて限られてるけど、それでも、出来る限りの事をして、一人でも多くの人達を助きたい…分かってくれるよね?」

「マタ…あえる?」

剣崎はふと言葉に詰まった。

約束は出来なかった。自分はアンデッドである。いつまたアルビノジョーカーのようなイレギュラーが現れたり、統制者が手を出してこないとも限らない。少女にまた会えるかどうかさえ、剣崎には分からないのだ。しかし、このままでは少女は納得しない…やがて剣崎は少女の瞳をまっすぐ見据えると、一つの願いを口にした。

「俺は今…運命と戦っているんだ。」

「ウンメイ？」

「ああ…それはとても強くて、俺も勝てるかどうか分からない…」

「アタシはカズマのおてつだいデキないの？」

「そんなことないよ。君には俺が運命に勝てるよう、一生懸命俺を応援して欲しいんだ。」

「オウエン？」

「うん。君の応援はきくと、俺に届いて勇気をくれる。そうすれば俺も、運命にきつと勝てるよ。そうしたら、君の所にまた来るから…約束する。」

「…ワカッた。」

少女は渋々と、剣崎から離れた。

「ありがとう。さようなら。」

剣崎は満面の笑顔で、少女に感謝と謝罪を伝えると、森の外へと歩き去っていった。

少女は遠くなっていく剣崎の背中を見ながら、不慣れな日本語で、一生懸命に叫ぶ。

「マタネ！カズマ！！ガンバッテネ！！」

少女の声援を受け、剣崎は新たな国…そして、運命との新たな戦いへと向かった。

だが…この時の剣崎には予想もできなかった。

バニティカードに閉じ込められた天音が突如として解放された理由が、全ての「仮面ライダーの世界」に迫る全ての世界の融合によってもたらされた、「滅びの現象」の前兆であることを…

全ての仮面ライダーを滅ぼす悪魔…世界の破壊者・デイケイドの誕生を…

剣崎が戦うべき新たな運命の歯車は、この時すでに回転を始めていたのである。

剣崎はいずれ知ることとなる。

自分を含めた9人の平成仮面ライダー達が、独立した物語の壁を越えて集結しつつあること…

全ての世界の悪の組織が集結した最大最悪の組織・大シヨツカアの暗躍…

そして運命に抗い続けた自分が、運命に飲み込まれつつある世界の破壊者を試すために、非情の剣を握らなければならないこと…

全ての世界の命運を握るライダー史上最大の大決戦、「ライダー大戦」は、遠くない未来にその火蓋を切ることとなる。

心に剣、輝く勇気をその強き信念に閉じ込めた戦士・仮面ライダーブレイドの新たな戦いは、彼の知らぬ間に既にラウンドゼロ開始の秒読みを初めていたのであった…

最終話（後書き）

すみませんでした皆様。デイケイドと繋がるといいながら説明文でバニティ消滅の理由とともにさらりと流しました。

最初はたつくんかヒビキさんを出して元の作品と同じように描写しようと思いましたが、途中でそれを無粋と感じ、このような結果となりました。

それにもかしたら伏線を張ったとしても、仮面ライダーという作品の性質を考えればバニティ消滅の理由を過剰には語らず、詳しい部分は超全集のような紙媒体によって何が起きていたのか詳細な説明を行うかもしれないと思いましたが。

もし次があるならば橘さんや浅倉、そして再び矢車を使ってSSかけたらな…と考えています。（光の伝説も詰まっていますが…）

最近ジャンルに関係のないアニメや特撮とのクロスオーバーに疑問を感じていますので、やるとしても敵やサブキャラはオリキャラになるかもしれませんが。（でもオリキャラは不得意なジャンルです…）

とりあえず今はこのような穴だらけの作品でも、最後までお読みいただいた皆様に、感謝を伝えたいと思います。

皆様、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4992y/>

仮面ライダー剣 MISSING ACE-NEO-

2011年12月21日18時46分発行